



四国88カ所霊場開創1200年の記念に制作された第74番札所甲山寺襖書。空海の書体である万象篆による。

讃樹會

令和6年2月1日発行

CONTENTS

- 02 第18回定期総会開催のご案内
- 03 会長選挙及び理事選挙のお知らせ
- 04 会長立候補所信表明
- 06 同窓生教授就任挨拶
- 10 退任・就任挨拶
- 19 【寄稿】医学部長就任に寄せて
- 20 ニュースの窓
- 24 【寄稿】寛学長退任記念祝賀会参加報告
- 26 【寄稿】恩師の先生方—最近のエピソード—
- 28 理事会議事録
- 29 国外留学助成金受賞の言葉
- 30 2023年度研究助成金／研究奨励金 受賞の言葉
- 33 学会開催報告
- 34 支部会・懇親会
- 37 学生支援（競争的資金）活動報告
- 40 医学部祭開催報告／病院ラジオ
- 43 編集後記／事務局からのお知らせ

発行 香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
TEL/FAX 087-840-2291
E-mail mddousou@kagawa-u.ac.jp
<https://dousoukai.site/sanjukai/>

発行人 平川栄一郎
編集人 谷 丈二
印刷所 株式会社



香川大学医学部医学科同窓会讃樹會

第18回定期総会開催のご案内

日 時 : 令和6年5月11日(土) 15時30分より

場 所 : 香川大学医学部 講義棟1階 講義室101

本年は、2年に一度の総会の開催並びに会長の任期満了にともなう会長選挙を執り行います。香川大学医学部医学科同窓会として更なる展開、飛躍を目指し、たくさんの方のご意見をいただきたいと思っております。ご多忙中とは存じますが、会員の皆様お誘い合わせの上、多数ご出席いただきますようお願い申し上げます。

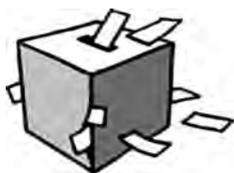
やむを得ず欠席される正会員の方は、同封の委任状をご送付頂きますようお願い申し上げます。委任状を含め、正会員の十分の一以上の参加をもって、総会が成立いたしますので、ご協力宜しくお願ひします。

尚、委任状の返信が無い場合は、議長に一任したものとみなしますのでご了承ください。

また、特別会員、賛助会員、名誉会員、準会員の方には投票権並びに総会での議決権がございませんので、あらかじめご容赦下さい。

タイムスケジュール

14:30~15:30	会長選挙公開開票	講義棟1階 講義室101
15:30~16:10	定期総会	講義棟1階 講義室101
	議題	①令和4年度・令和5年度事業報告 ②令和5年度決算報告 ③令和6年度予算案 ④理事会からの審議項目
	総会記念講演会	講義棟1階 講義室101
16:30~17:00	講師	香川大学医学部長 西山 成 先生(平成5年卒・8期生)
	演題	「香大医、生まれ変わるために」
17:30~19:30	懇親会	旬菜小蝶(多肥下町)



令和6年度・7年度 会長選挙及び理事選挙のお知らせ

同窓会選挙規程 第2条 選挙管理委員会

- 1 理事会は常任委員会として選挙管理委員会を設置し、会長選挙、理事選挙、不信任決議、など同窓会運営にかかわるすべての投票行動を実施管理する。

会長選挙

同窓会報66号（令和5年9月号）にて告示致しました会長選挙につきまして、立候補者が星川広史氏のみとなりましたので信任投票を行います。立候補の所信表明及び推薦状はP4、P5をご確認下さい。指定の投票用紙の信任・不信任のいずれかを○で囲み、署名の上、同窓会事務局まで郵送または直接お届けいただきますようお願い致します。

投票は締め切り厳守でお願いします。（4月15日午後5時必着）

選挙管理委員会が総会において集計結果をご報告いたします。（5月11日15：30～）

理事選挙

同様に会報にて告示致しました理事選挙につき、会員のみなさまから次年度理事候補を卒年単位でご推薦いただきました。上位に推薦されました会員が次年度の理事候補者となっていますので（同封の理事選挙用紙をご確認下さい）、信任投票をお願い致します。

理事選挙の信任投票につきましては、

信任の場合は記入せず、不信任の場合のみ「×」を記入下さい。

こちらも同様に、同窓会事務局まで郵送または直接お届けいただきますようお願い致します。

（4月15日午後5時必着）

選挙管理委員会委員長 河井信行

《《 総会出欠返信並びに投票方法について 》》

- ① i 会長選挙投票用紙（ピンク）に署名し、信任・不信任のいずれかを○で囲む。
ii 会長選挙投票用紙を茶封筒に厳封する。
- ② 理事選挙用紙に署名し、不信任の場合だけ「×」を記入する。
- ③ 出欠確認書に必要事項を記入し、委任状に署名する。
(出席の場合は委任状の記入は不要です。)
- ④ ①～③を返信用封筒で返信下さい。

返信締切

4月15日（月）午後5時

讃樹會会長立候補所信表明

5期生 星川 広史

私こと、星川広史（平成2年卒）はこの度の讃樹會会長選挙に立候補すべく、ここに所信を述べさせていただきます。

日本の社会環境の変化、特に少子高齢化に伴う人口動態の変化により、日本の医療を取り巻く環境も大きく変貌しつつあります。

高度先進医療を行い、未来の医療人を育成することを使命とする本学医学部・附属病院を取り巻く環境も激変しており、これからの数年間の舵取りによってはまさに本学の存続にかかわる極めて重大な岐路に立っていることを実感しています。

病院経営においては、年々減少する運営費交付金と今後15年にわたって毎年10数億の長期借入金の償還を抱え、医療経費の増大、人件費の増加といった支出を抑えることができない状況で、手術件数の減少や病床稼働率の低迷など収入の増加が見合わず、このままでは民間病院であれば倒産してもおかしくない状況です。

そのような状況の中、昭和55年に開学した本学医学部（香川医科大学）の再開発が行われることとなりました。母校を離れて久しい先生方には実感がわかないかもしれませんが、開校から半世紀近く経った講義棟、実習棟、基礎臨床研究棟は相応の経年劣化が進み、DX機能やメディアを活用したアクティブラーニングといった時代に即した学習活動への対応からも程遠い現状です。医学部再開発に関しては平成29年頃より必要性が論じられておりましたが、自己財源の不足により実現性が懸念されておりました。この度、文部科学省への概算要求が通り、医学部再開発事業として全体事業費として56億円程度予算が計上できる見込みとなりました。

医学部の再開発に関しては“DRIVE (Design thinking, Resilience, Informatics, Venture & Evolution) to the future”のスローガンのもと、将来への挑戦と覚悟を

胸に、バリアフリー環境整備、DX機能強化とメディア活用によるアクティブラーニング学習活動の強化、学部間のコミュニケーション活性化と他学部・企業・行政とも協働できるオープンイノベーションラボの設立、を目指して6期（R5～R10）に渡る工期を予定しています。しかしながら、事業費による補助は基本的な工事の部分に対してのみで、移転に関わる諸経費などを併せると第1期工事だけでも2億6千万程度資金が不足することになります。不足分は医学部開講50周年基金や講座研究費からの拠出、職員からの寄附など、大学として出来得限りの努力はして参りますが、それだけでは賅いきれない状況がございます。

このような状況を鑑み、讃樹會を通じて全国に散らばっている同窓の先生方に幅広く支援を呼びかける必要があります、それを遂行するためには母校の状況を最も把握している現職職員にその責務があると判断いたしました。

私は現在医学部耳鼻咽喉科学講座の教授と附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科の診療科長を務めさせていただいており、医学部運営においても広報・再開発担当の副医学部長に任命されております。現職の教授が同窓会長を兼任することへのご批判もあろうかと思いますが、再開発が本格化するこれからの特に2年間で正念場と心得、会長選に立候補するに至った次第です。ピンチはチャンス、と考えることもできます。これを機会に、本学を卒業し全国で活躍する4000人に近い同窓生に、会員相互の親睦を図り、母校の発展と学術の発展に尽くすという同窓会本来の役割を果たすとともに、本学の将来・未来を担う学生・若手医師たちへ希望を届けたいと思います。長期的な職務とは考えず、1期2年もしくは長くても2期4年でその責務に集中したいと考えております。

推 薦 状

令和6年度・7年度香川大学医学部医学科同窓会、讃樹會会長
選挙に 5期生 星川広史 君を推薦します。

推薦人

- (6)期生、(平成3)年卒 三木宗範 (印)
- (5)期生、(平成2)年卒 下木 勉 (印)
- (6)期生、(平成4)年卒 日下 玲 (印)
- (5)期生、(平成2)年卒 西山 佳宏 (印)
- (8)期生、(平成5)年卒 三宅 啓介 (印)
- (14)期生、(H11)年卒 横牛 双蓮 (印)
- (7)期生、(H4)年卒 岡野 圭一 (印)
- (8)期生、(H5)年卒 金西 賢治 (印)
- (7)期生、(H4)年卒 木下 陽之 (印)
- (3)期生、(昭3)年卒 抄元 幹史 (印)
- (大学院) (H25)年卒 小坂 信二 (印)
- (1)期生、(昭61)年卒 濱本 龍七郎 (印)
- (4)期生、(H元)年卒 佐藤 清人 (印)
- (3)期生、(S63)年卒 横井 徹 (印)
- (6)期生、(H3)年卒 中條 浩介 (印)
- (5)期生、(H2)年卒 科場 龍次 (印)
- (16)期生、(H13)年卒 田岡 利宜也 (印)
- (17)期生、(H14)年卒 森 照夫 (印)
- (12)期生、(H9)年卒 松原 あい (印)
- (25)期生、(H22)年卒 栗川 泰 (印)
- (28)期生、(H25)年卒 大内 陽平 (印)
- (34)期生、(H31)年卒 樋口 雅大 (印)



同窓生教授就任挨拶

香川大学に感謝をこめて



和歌山県立医科大学
救急・集中治療医学講座教授
同附属病院高度救命救急センター長

井上 茂亮（平成12年卒・15期生）

令和5年10月1日付で、和歌山県立医科大学 救急・集中治療医学講座教授、および附属病院高度救命救急センター長を拝命いたしました井上茂亮です。映えある讃樹會にてご挨拶の機会をいただき、大変光栄に存じています。

香川医科大学（当時）では水泳部とラグビー部に所属し、恵まれた環境のもと生涯の友となる同級生と尊敬できる先輩や後輩と充実した学生時代を過ごしてきました。勉強そっちのけで讃岐の丘で青春を謳歌していた私ですが、振り返れば医学部後半に私の人生を決定づける出来事が2つありました。

1つ目は、麻酔科でのポリクリ中、ICUの片隅で講義を受けていた時です。後ろに立ってレクチャーを聞いていた私は、シャーカステンから胸部レントゲン写真がずれ落ちてきていることに気づきました。まさに剥がれ落ちそうなその瞬間、とっさに前に出て写真を手で止めました。「君は救急医に向いている。救急医になれ！」。当時麻酔科の講師であった小倉真治先生（後に岐阜大学救急災害医学分野 教授、同大学附属病院長）からそう声を掛けていただきましたが、卒後は京都大学整形外科に入局しました。しかし小倉先生の暗示と全国初のドクターヘリが神奈川県に導入されることを知り、日本初のフライトドクターになるべく縁もゆかりもない東海大学付属病院高度救命救急センターの門を叩きました。人気TVドラマ「コード・ブルー」が放映される7年前で、救急医やドクターヘリの社会的認知も不十分な時代でした。「無謀だからやめとけ。食いつぶされるぞ」と先輩や家族に反対されましたが、小倉先生の一言に自身の可能性を賭け、ここまでやってこれたと思っています。

2つ目は、6年生のときの特別授業でした。「讃岐の丘から世界に発信」という当大学の理念を坂出市立病院の塩谷泰一病院長（当時）が紹介されたことを私は今でも鮮明に覚えています。「これからの香川医大生は海外に向けて発信し、また海外で活躍しないといけない。君たちならきっとできる」という熱いメッ

セージに私は大変感銘を受けました。医学部3年生春休みのカルガリー大学における短期留学が楽しくも不完全燃焼に終わったこと、そして水泳部の先輩である中井浩三先生（14期生 高知大学医学部皮膚科学講座教授）が米国留学で活躍していたことに刺激を受け、2008年より米国ワシントン大学に2年間研究留学しました。その後も2014年に米国バンダービルト大学で臨床研究修士を取得しました。米国でのメンターや研究者仲間・臨床医・日本からの留学仲間からの学びは、私の価値観・仕事観・人生観に大きなインパクトをもたらし、高い視座で世界レベルに触れることができました。このように、国際的な医療人創成を指向した本学の理念は、今も私のよき道標となっています。

帰国後の2015年に東海大八王子病院救急センター長を拝命し、東京都南多摩地域の救急医療体制の構築、災害対策、救急受け入れ件数の増加に尽力してきました。しかし父の他界を機に地元関西への移動を決意し、2018年に神戸大学災害・救急医学分野 特命教授として赴任し、救急部から救命救急センターへの昇格・院内急変システムの始動・大学院生の研究指導などを担当してきました。その後、和歌山県立医科大学 救急集中治療医学講座の主任教授選考への挑戦の機会をいただき、現職に至ります。

このようなキャリアですが、私の人生の岐路でいつも的確なアドバイスをくれたのは香川大学の同級生・先輩・後輩でした。中でも同級生である中井泰代先生（旧姓：川上）・川越いづみ先生・三崎伯幸先生、後輩である内藤宗和先生（17期生）・平井宗一先生（17期生）・大片祐一先生（19期生）には格別にお世話になりました。また救急・集中治療医学領域においては、阿部智一先生（19期生）・辻友篤先生（20期生）・三浦直哉先生（22期生）・藤浪好寿先生（28期生）・白川尚隆先生（28期生）をはじめ多くの卒業生が大活躍され、コラボレーションをさせていただいています。この場を借りて皆様にお礼申し上げるとともに、今後は皆様のキャリア支援などを通して讃樹會に貢献したいと思

います。

和歌山県立医科大学高度救命救急センターは全国の国公立大学に先駆けてドクターヘリが導入され県内から重症患者が集約される全国トップクラスのハイボリュームセンターです。教授とはまさに「教え授ける」役職ですのでGive & Giveを心がけ、医学生と研修医を対象としたベッドサイドティーチングや毎朝の

カンファレンスの充実など教育活動に専心しています。変わりゆく時代を見据えながらも、今後は「紀の国より世界に発信」をモットーに次世代の救急集中治療人材を育成したいと思います。讃樹會の皆様におかれましては、今後ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

略歴

平成12年3月	香川医科大学医学部医学科（現：香川大学医学部医学科）卒業
平成12年4月	京都大学医学部附属病院 整形外科 研修医
平成13年4月	浜松労災病院 整形外科 研修医
平成14年4月	東海大学医学部附属病院 高度救命救急センター 臨床研修医
平成20年3月	東海大学医学研究科博士課程 修了
平成20年4月	米国セントルイス ワシントン大学医学部麻酔科 博士後研究者
平成22年4月	東海大学医学部 専門診療学系 救命救急医学 講師
平成23年1月	東海大学 創造科学技術研究機構 医学部門 講師
平成26年5月	米国ヴァンダービルト大学医学部 臨床研究マスターコース (MSCI) 修了
平成27年4月	東海大学医学部附属八王子病院救急センター長 外科学系 救命救急医学 専任准教授
平成30年7月	神戸大学大学院医学研究科 外科系講座 災害・救急医学分野 先進救命救急医学部門 特命教授
令和5年10月	和歌山県立医科大学救急集中治療医学講座 教授 同病院高度救命センターセンター長

教授就任にあたって

臨床につながる病理学の実践を目標に

香川大学医学部
病理病態・生体防御医学講座分子腫瘍病理学 教授



門田 球一（平成15年卒・18期生）

香川大学医学部同窓会讃樹會の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。2023年10月1付けで、香川大学医学部病理病態・生体防御医学講座分子腫瘍病理学の教授として着任しました門田球一と申します。同窓会会報において、新任のご挨拶をする機会を頂戴し、大変ありがたく存じます。

私は愛媛県出身で、夏目漱石の小説「坊っちゃん」の舞台となった愛媛県尋常中学校を前身とする愛媛県立松山東高校を卒業後、香川医科大学に入学しました。2003年に香川医科大学を卒業し、卒後は病理学の道に進み、香川大学医学部附属病院や関連施設で病理診断の研鑽を積んできました。香川大学大学院医学系研究科の期間には、肺癌組織におけるリンパ管新生の生物学的意義に関する臨床病理学的な研究やアデノウイルスベクターを用いた遺伝子治療に関する基礎研究を行い、研究活動の基盤を築くことができました。博士号を取得後も、腫瘍の組織形態や腫瘍マーカーに基づき悪性度を解明するため臨床病理学的な研究を行ってきました。2009～2015年には、Memorial Sloan Kettering Cancer Center（ニューヨーク市）に留学し、肺癌を対象とする研究に専念し、国際的な呼吸器病理医のネットワークの中で充実した仕事をすることができました。2015年に帰国し、再び香川大学医学部附属病院で病理診断業務に従事するとともに、病理医を目指す後進の育成に努め、臨床業務と平行して臨床に還元される病理学的研究を目標としてきました。

2021年4月には島根大学医学部に病理学講座器官病理学教授（同大学医学部附属病院病理診断科 科長・病理部 部長）として赴任しました。島根大学医学部病理学講座では、島根県立中央病院や松江赤十字病院、松江市立病院、浜田医療センター、益田赤十字病院といった県内の基幹病院が連携施設となっており、私が着任する以前から、整備された体制で専攻医の指導が行われていました。私が在任中には幸運にも計5名の病理専攻医が在籍し、そのうちの3名はプログラムを修了して来年の病理専門医を受験予定となっています。いずれもが非常に優秀な病理医であり、専門医を取得後は島根県の病理診断体制の充実や大学での研究発展

に寄与し、人材不足に悩む中四国の病理学会の活性化のために大きく活躍してくれるものと期待をしています。島根大学での研究活動・指導としては、在任中に2名の大学院生の博士号取得をサポートすることができました。また、香川大学と島根大学の共同研究の枠組みを構築し、特に「癌の悪性度を規定する病理学的因子の解明」を大きな研究テーマとして、今後も発展させたいと考えています。

みなさまご存じのこととは存じますが、病院における病理部門の業務としては、病変の一部を採取する生検や摘出検体を対象とする組織診断、粘膜などから擦過し採取された細胞や剥離細胞を対象とする細胞診断、不幸にして亡くなられた患者さんの死因を究明するための病理解剖が含まれます。近年では、患者さんごとに最適な治療法を提供するために、コンパニオン診断やがん遺伝子パネル検査が発展し、病理検体の取り扱いを含めて病理部門の役割や臨床部門との連携がさらに重要となっています。また、医学部の病理学講座としては、病院の臨床部門との共同研究を通じて、将来的に患者さんのお役に立てるような研究成果を目指す必要があります。教室名の分子腫瘍病理学の名の通り、「腫瘍細胞の進展に伴う形態変化や分子機構を解明し、癌の予防や診療の発展に寄与」したいと考えています。具体的には、テロメアやテロメラーゼの変化に基づいて発がん機序や加齢の関連性を解明する研究、組織マイクロアレイによる免疫組織化学的解析を用いて腫瘍の悪性度を解明する研究、術前治療後の癌細胞の形態的变化を解析する外科病理学研究、癌幹細胞関連分子を標的とする新規治療薬開発を目指したトランスレショナルリサーチ、二光子励起顕微鏡によるイメージングに基づく研究、老化細胞の細胞死誘導メカニズムを解明する研究などを教室の主たる研究テーマに掲げています。

残念ながら、地方では人口あたりの病理専門医数あるいは病理学研究者の数は十分とは言えず、将来的な病理診断あるいは病理学的研究の体制維持には厳しい現状があり、香川県も例外ではありません。香川大学医学部の分子腫瘍病理学講座は、開学時の香川医科大学

学時代に「第一病理学」として開設され、後に「腫瘍病理学」の名称を経て、この度「分子腫瘍病理学」と名称変更されました。教室としては私で4代目の教授となります。開設以来40年以上となる教室の良い伝統を引き継ぎながら、今後も学生や研修医に病理学の魅

力を伝え、病理医をリクルートし、県内外で活躍できる病理医や病理研究者を育成したいと考えております。若輩ものではございますが、誠心誠意、努力して参ります。今後も、讃樹會の皆様のご指導を賜りますように何卒お願い申し上げます。

略歴

平成15年3月	香川医科大学医学部医学科 卒業
平成15年4月	香川医科大学医学部附属病院 研修医
平成17年4月	香川大学医学部附属病院 医員
平成18年4月	香川大学医学部附属病院 助手
平成19年4月	香川大学医学部附属病院 助教
平成21年3月	香川大学大学院医学系研究科 修了
平成21年10月	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, NY, USA. Research Fellow
平成24年10月	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, NY, USA. Research Scholar
平成25年10月	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, NY, USA. Senior Research Scientist
平成27年4月	香川大学医学部附属病院 助教
平成30年6月	香川大学医学部附属病院 学内講師
平成31年4月	香川大学医学部附属病院 病理診断科 副科長・病理部 副部長 香川大学自然生命科学系 講師
令和3年4月	島根大学医学部病理学講座器官病理学 教授 島根大学医学部附属病院病理診断科 科長・病理部 部長
令和5年10月	香川大学医学部病理病態・生体防御医学講座分子腫瘍病理学 教授

退任・新任挨拶

医学部長退任のご挨拶

—医学部長の任を感謝の気持ちで振り返る—



神経機能形態学教授 三木 崇範
(平成3年卒・6期生)

令和3年10月からの医学部長の任を令和5年9月末で終えました。この間ご支援頂きました関係者の皆様方に感謝申し上げます。特に、執行部副医学部長の8名の先生方にはお世話になりました。原稿を書いているいまお一人お一人の顔が浮かんで参ります。互いに信頼関係で結ばれ、目指す方向を同じくして、同じ志で進んできた同志です。このような仲間恵まれて医学部長の任に当たることができた身の上に感謝している次第です。

副医学部長（医学科教育担当）

日下 隆（小児科学教授）

副医学部長（看護学科教育研究担当）

谷本公重（小児看護学教授）

副医学部長（臨床心理学科教育研究担当）

竹森元彦（心理療法実践学教授）

副医学部長（大学院教育及び研究担当）

藤原祐一郎（分子生理学教授）

副医学部長（入学試験担当）

桑原知巳（分子微生物学教授）

副医学部長（評価・広報・社会連携担当）

木下博之（法医学教授）

副医学部長（総務担当）

中島一浩／横川利子（事務部長）

学生と将来の大学の為に尽力するという固い決意の下、医学部長の任に就きました。教育を特に重要視し、人間性豊かな医療人の育成を通じて社会に貢献する人材を育成するために、以下の3つを涵養することを柱として執行部が一丸となって実践してきました。

- 1 医療人としての倫理観や道徳観
- 2 自ら進んで事象の理（ことわり）に迫る学修姿勢
- 3 国際人として素養

とは申しましても、人を育てるには時間を要しますし、直ぐには結果が出ないものです。流れる川の瀬に字を書くが如く儂いものとさえ例えられることがあります。それでも、川の岩に字を刻み込むくらいの真剣さで取り組まなければならないとも言われます。その通りに

取り組んできました。この方針は、解剖学の教授としての教育方針として、継続して掲げて参ります。何年か後に輝かしい成果を目の当たりに出来ることを楽しみにしております。

医学部長就任前から感染が拡大していた新型コロナウイルス感染症対策には苦勞しました。日下先生との相談のもと、学生には患者さんから直接学ぶ臨床実習を1日でも多く経験させたいという方針で教育を進めていました。大学本部からは医学部はいつになったら実習を中止するのかと詰め寄られましたが、学生をオリジンとする感染者を出していないこと（当時、子供を中心とした家族内感染例が多くありました）を橋頭堡として、突っばねていました。その盤石な基盤作りのために、3学科全学年を対象として、学科長と共に講義室に向き、対面で「一人ひとりが香川大学医学部の大切な学生さんと思っている、いまが踏ん張りどころ、感染防止のための行動規範遵守に協力して欲しい」旨を訴えました。まさに「学生との信頼関係の構築」でした。そこで大変印象的でも忘れないのは、話の間私の目を見て頷いてくれる学生さんが何人もいたことです。私の想いが伝わっている、しっかりとした手応えを感じました。このような学生さんがいることを頼もしく思いました。

香川大学医学部は香川医科大学として開講して40年余の歴史を刻んできました。この間5000人弱の卒業生を世に送り出し、医療・医学研究の最前線で活躍する人材を輩出してきました。一方で学び舎である建物の老朽化は進んでいます。そこで医学部再開発（改修）は予定よりも1年繰り上げて始まりました。令和5年度の講義棟改修から始まり、6か年計画で実習棟・基礎臨床研究棟・大学院棟の改修が行われることになりました。本改修の目玉は、図書館前に3階建ての新棟を建築することです。これを再開発のシンボルとして、新しく生まれ変わり、更なる高みを目指す香川大学医学部の固い決意の象徴です。同窓の私は、この学び舎

で学友と共に学び、当時の先生方から様々な薫陶を受けました。その学び舎薫陶がなければいまの私はなかったと云っても過言ではありません。再開発の時に偶然にも医学部長の任にある者の責務として、確実に再開発を遂行し、次の世代にバトンタッチすることとしました。難行であることは目に見えていますが避けては通れない道と覚悟を決めた次第です。幸いにして、いま講義棟の改修は予定通りに進み、完成に近づいています。完成した姿を目にすると、次計画へのモチベーションとなると信じています。

医学部長としての在任期間中には様々なことを経験

して、それが全て自己の研鑽につながりました。個人プレーでリーダーシップを取って進める事態は皆無に近かったように感じます。それよりも大きな組織を前に進めるのに大切なことは、どれほど先見の明を以って事を進められる余裕があるか、周囲や相手の気持ちをどれほど慮って当たれるか、そして、どれほどのバランスを持ち合わせているかの3つがいかにか大切に思ったかをつくづく感じています。これからは解剖学の教授として教育や研究に専念すると共に、今まで以上に学生と大学の為に尽力することを御誓い申し上げます。最後に、在任中お世話になりました皆様方に心より感謝申し上げます。

医学部長就任のご挨拶



香川大学医学部長

西山 成

(平成5年卒・8期生)

2023年10月1日より医学部長を拝命いたしました平成5年卒・8期生の西山 成でございます。讃樹會の皆様におかれましては、平素より香川大学医学部に対してはもとより、個人的にも大変お世話になっております。いつも多大なるご支援をいただいておりますことを、この場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。

さて、私は1993年に香川医科大学を卒業して6年ほど臨床研修をしてから渡米し、基礎研究の道に進みました。帰国後、2007年より香川大学医学部薬理学の教授を拝命いたしましたが、当時は母校初の医学部教授でありましたことから、大変苦勞したことを憶えております。あれから約17年、今では19名の讃樹會所属の先生が医学部医学科教授にご就任、あるいは就任予定となるまでの規模に至りました(令和5年12月時点)。これは医学部医学科教授会構成メンバーの約半数となりますことから、本学医学部の運営において讃樹會の重要性が益々増してきていると言えます。

私は2017年より学長特別補佐、2021年より研究担当・副理事を兼務することにより、大学本体の運営の勉強をさせていただきました。このような経験をもとに、残りの人生の軸足を医学部に移し、その発展に全力を尽くす決意をいたしました。これまでの香川大学医学部の歴史を引き継ぎつつ、以下に示しますビジョンでこれから求められる未来医療人の育成や戦略的な創発研究の展開を図り、地域医療活動を推進し続けて参る所存です。

【教育推進ビジョン】：未来で生き残れる高度医学・医療人の育成

我々は新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、医学・医療の限界にぶち当たりました。しかし、その一方では多くの情報がリアルタイムに共有され、ワクチンなどが短期間に開発されるなど、New Normalと言える活動展開も目の当たりにいたしました。このような目まぐるしい社会変容が続くこれから

のウィズ・ポストコロナ時代においては、柔軟な思考力を持ち、自ら考え行動できる教育研究者や医療人が求められてくるものと考えます。これに対して香川大学は教養課程でDesign thinking：イノベーションを創出する「デザイン思考」、Risk management：レジリエンスやセキュリティ等に資する「リスクマネジメント」、Informatics：デジタル社会を生きるための「インフォマティクス」の3つの能力を身につけた新たな価値を創造できる人材を育成します。続いて医学部専門課程では、高度な専門知識に加え、「奉仕の心」と「リーダーシップ」の2つを兼ね備える、高い倫理観と豊かな人間性を持つ将来の医療人を養成して参ります。さらに、国際化とダイバーシティーに関連する活動をより強化し、多様な価値観を理解し、自由寛大な創造意欲を持つ未来人の育成に努めます。このような人材育成は必ずやAIにも勝る高度な教育研究者や医療人の養成につながり、地域を支える医療のみならず、人類の発展にも大きく寄与するものであると考えます。

【研究推進ビジョン】：ヘルスサイエンス領域における戦略的な創発研究の展開

香川大学大学院医学系研究科では医学科、看護学科、臨床心理学科の3つの学科の学術領域を融合させた独自性を持つ研究を推進して参ります。医学部キャンパスをヘルスサイエンス領域におけるイノベーション・コモンズとしての拠点として再開発することにより、本学創造工学部や農学部、あるいは産業総合研究所四国センターと異次元のコラボレーションを展開し、ヘルスサイエンス領域の新学術分野の創生を地域との共創につなげるのみならず、国際化を戦略的に強化して参ります。さらに、このような研究強化を通じ、世界レベルの創発研究を先導できる研究者の育成に推進して参る所存です。

【社会貢献推進ビジョン】：医学部附属病院と同化した地域医療活動の推進

香川大学医学部は医学部附属病院を拠点として、「社会貢献」をキーワードに地域医療を推進しており、

実際、医学部教員の多くは附属病院で日常診療業務を行っております。日々進化する医療技術に対応して高度な医療サービスを提供するだけでなく、緊急時においても迅速かつ適切な医療支援を行うことをミッションとし、日々の診療活動を続けております。一方、有事の際には医学部が独自に附属病院の医療活動をサポートすることが求められます。例えば、私は新型コロナウイルス感染症のパンデミックの際には行政と協力してPCR検査体制の構築、ならびに軽症感染者専用ホテルの立ち上げなどを主導して参りました。医学部附属病院を中心とした日常の診療に加え、今後想定される南海トラフ地震などの未曾有の災害時においては、香川大学医学部は附属病院と一体となって地域医療活動のサポートを推進して参る所存です。

以上、香川大学医学部は、高度未来医療人の育成、戦略的な創発研究の展開、地域医療活動の推進に邁進して参りますが、開講50周年を迎えるキャンパスの老

朽化に加え、看護学科と臨床心理学科の併設による学生数増加に伴う狭隘化も著しく、各活動に大きな障害をもたらすようになってきておりました。そこで、諸問題を一気に解決して生まれ変わるべく、令和5年度から6年間かけて大規模な再開発を開始しております。再開発事業の一部は自己財源で実施することを求められておりますことから、讃樹會の皆様におかれましては再開発事業に対し、温かいご支援を賜りますことを最後にお願ひ申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。

P.S. 医学部長ブログや再開発ホームページも公開しておりますので、是非ご覧くださいませ

<https://nishiyama-akira.hatenablog.jp>

<https://www.med.kagawa-u.ac.jp/~redevelop/>

香川大学長就任ご挨拶



香川大学長

上田 夏生

日頃より讃樹會会員の諸先生方には大変お世話になりありがとうございます。私は2023（令和5）年9月末で香川大学医学部生化学教授を辞し、10月1日より国立大学法人香川大学長を拝命いたしましたので、一言ご挨拶申し上げます。

私は2001（平成13）年1月1日付で、市川佳幸先生（故人）の後任教授として、徳島大学医学部から香川医科大学生化学講座に参りました。同講座には既に大西平先生が助教授として、富田修平先生（5期）と古川愛造先生（9期）が助手として活躍しておられ、温かく迎えてくれました。その後、講座には坪井一人先生、岡本安雄先生、宇山徹先生、そして最近では、佐々木すみれ先生がスタッフとして加わり、私の専門分野である酵素学、特に脂質代謝酵素の研究を推進する体制が整いました。臨床講座や附属病院などから社会人大学院生が来てくれ、また、中国やバングラデシュ等からの留学生にも恵まれました。キャンパス内に機器センター（現・機器共用デジタルラボ）、放射性同位元素実験施設、動物実験施設が揃っているなど、恵まれた研究環境にも大いに助けられました。その結果、22年余りに渡って生化学の教育・研究活動を続けることができ、研究面では、生理活性脂質であるマリファナ用物質「エンドカンナビノイド」（カンナビノイド受容体の内因性アゴニスト）とその関連物質である*N*-アシルエタノールアミンの代謝に関していくつもの重要な知見を得ることができました。これらの成果に対して、2020年に国際カンナビノイド学会でMechoulam Award（学会賞）を日本人として初めて頂くことができました。

大学は、2003年10月に旧香川大学と統合して香川大学医学部になり、翌年4月には独立行政法人化されて国立大学法人香川大学となりました。私は次第に学部運営に携わるようになり、2017年10月から2期4年間、医学部長を務めさせて頂きました。この間に、国立大学医学部で初の心理職養成学科となる「臨床心理

学科」とその大学院修士課程「臨床心理学専攻」の設置に貢献できたことは感慨深い思い出です。そして、このたび、多くの先生方からご推薦頂き、寛善行学長（前泌尿器科学教授）の後任として学長に選出されました。

現在の香川大学は、教育学部・法学部・経済学部・医学部・創造工学部・農学部の6学部と専門職大学院の地域マネジメント研究科等からなります。また文理融合型の大学院である創発科学研究科の修士課程が2022年4月に開設されたのに続き、2024年4月には同研究科の博士後期課程がスタートすることになっています。学部教育では、「デザイン思考（D）」「リスクマネジメント（R）」「インフォマティクス（I）」の3つの頭文字から名付けられたDRI教育に加えて、英語力強化、Diversity & InclusionやSDGsへの取り組み等を通じてグローバル化に対応できる人材育成をいっそう進めていきたいと思っています。昨今、大学は地域貢献を強く求められていますが、本学は文系・理系の学部等がバランスよく揃っている強みを活かして地域のさまざまな課題解決に協力しており、さらに深化させたいと思っています。医学部においても、他学部や国際希少糖研究教育機構をはじめとするさまざまな学内組織と連携を強めるとともに、地域の保健医療の課題にいっそう取り組むこと等により、教育・研究活動をさらに発展させて頂きたいと思っています。

医学部キャンパスでは、医学部創立50周年に向けて今年度から再開発事業が始まり、現在、講義棟の改修が進行中です。足掛け6年にわたる大規模な工事により、基礎臨床研究棟を始めとして医学科・臨床心理学科に関係する建物の多くが改修され、地域に開かれた医学部として生まれ変わる予定です。

本学は、讃樹會会員の皆様のご支援とご協力なしには成り立ちません。本学の更なる発展、輝ける未来のため、引き続き、温かいご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

病院長就任のご挨拶

香川大学医学部附属病院の発展に向けて



香川大学医学部附属病院長

門脇 則光

2023年（令和5年）10月1日付で、香川大学医学部附属病院長を引き続き拝命しました。杉元幹史（診療・医療安全担当）、横井英人（研究担当）、堀井泰浩（経営・評価担当）、岡野圭一（教育・広報・地域連携担当）、阿部 慈（看護部長、医療の質管理担当）、横川利子（事務部長、総務担当）副病院長という執行部メンバーにて全力を尽くす所存です。就任に伴い、讃樹會会員の皆様にご挨拶申し上げます。

2年前に病院長に就任してからは、「病院経営」「働き方改革」「職員の働きがい」の3点を中心に改革を進めてまいりました。

病院経営では、収入が増えてもそれ以上に支出が増える「増収減益」のトレンドが続いていることに加え、コロナ空床補償の終了、病院再開発の債務償還、電気代高騰・物価上昇が経営難に追い打ちをかけています。このような状況に立ち向かうために、この2年間さまざまな手を打ってまいりました。まず2022年8月に病院経営コンサルタントを導入し、病院経営に対する職員の意識改革を図っています。これにより、さまざまな管理料・加算の取得が大幅に伸びています。また、2023年4月に超音波センターを新設し、超音波検査件数が飛躍的に増えて、診療および病院経営に大きなプラスをもたらしています。さらに、職員全員に対し当院の経営状況の説明会を行うとともに、病院長と事務部がすべての診療科のカンファレンスに足を運んで各科個別の経営データを示し、若手を含むすべての医師からの忌憚のない意見を集めました。これにより、各科特有の課題が把握でき、また危機感を共有することができました。

2024年4月から始まる「医師の働き方改革」は、診療、教育、研究、地域医療支援というマルチタスクを抱える大学病院の医師にとってとりわけ大きな困難を突きつけています。限られた勤務時間でこれらの業務を果たすためには、やはりタスク・シフト／シェアが最大の鍵を握っています。その最も顕著な成功例が当院の麻酔科医アシスタントです。1年間のトレーニングを積んだ臨床工学技士が麻酔業務を助け、麻酔科医不足と育児中の女性医師の勤務時間制限を補っています。その成果は全国的にも麻酔関連学会で注目され、

NHKニュースでも取り上げられました。

職員が働きがいを感じるうえで、自分たちの意見が病院運営に取り入れられることが重要です。それに資するしくみとして、看護師、薬剤師以外のほぼすべてのメディカルスタッフに横串を通す形で横断的な組織「医療技術部」を2023年10月に作りました。その部長には医師ではなくメディカルスタッフ（初代は診療放射線技師長）を就け、看護部、薬剤部と並ぶ一大組織にしました。これによりメディカルスタッフの協力体制が取りやすくなるとともに、現場の意見が病院執行部に届きやすくなり、メディカルスタッフのモチベーションアップが期待できます。

また、大学病院は市中病院と比べて業務効率が悪く雑用も多いことで悪名高いですが、これを改めるために、最近市中病院に勤務した若手医師から、「大学病院と市中病院のどこが違うのか」のアンケートを取り、業務改善のヒントにしました。現場でないとわからない意見が数多く寄せられ、例えば血液培養の物品セットを作っておく、化学療法開始の点滴を看護師が行うなどの個別具体的な改善を速やかに進めました。さらに、前述のように全診療科のカンファレンスを回って若手医師と直接意見交換し、病院運営の改善に役立っています。こうしたさまざまな取組により現場の意見を広く取り入れることが、職員のやりがいのアップにもつながりますし、医師の働き方改革に役立つタスク・シフトを推進します。

地域の先生方と顔の見える関係を築くために、県内各医師会にお邪魔して出前講義「DECLICON」を開催したり懇談会を開催したりと、コロナ禍で途絶えていた活動を再開しました。また、県民の皆様にご来院を身近に感じていただくために、2022年冬から香大病院PAPER「KUH」（Kagawa University Hospitalの頭文字で「く〜」と読みます）を半年に1回発行しています。麵通団団長の田尾和俊氏をアドバイザーにお迎えして、田尾団長と職員の軽妙な対談など、当院のさまざまな側面をご紹介します面



白い記事を掲載しています。さらに、マスコットキャラクター「くーちゃん」を作ったり、LINE公式アカウントを開設したりと、さまざまな取り組みを展開しています。よろしければ皆様も、最後にある二次元バーコードからぜひ友だち登録をよろしくお願いいたします。

もちろん、大学病院、特定機能病院として、教育、研究、新規治療への取り組みも進めており、医学部とスクラムを組んで、若手のリクルートや先進的な研究成果を発信しています。

当院の不動のキャッチフレーズ「ささえる、つながる、リードする」のもと、さまざまな困難をはねのけ

て香川大学医学部附属病院をさらに発展させるべく、全職員とともに職務に邁進する所存です。今後ともご支援、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



香川大学医学部附属病院
LINE友だち募集中

教授就任にあたり

オリーブ色に染まる



香川大学医学部麻酔学講座

教授 荻野 祐一

讃樹會の皆様、2023年8月1日に香川大学医学部麻酔学講座の第四代目教授として赴任いたしました荻野祐一（おぎのゆういち）と申します。昨年（2022年）白神豪太郎前教授の御退官に伴って行われた本麻酔学講座の教授選考を経た結果、ご縁あって私が香川の地を踏み、讃樹會の皆様、附属病院と麻酔・ペインクリニック科医局、それから酔香会（香川麻酔科同門会）の先生方々に温かく迎え入れていただきましたことに、先ず厚く御礼申し上げます。

私にとって香川は初めての地であり、讃樹會の皆様と学生時代の経験を共有できないのは至極残念ではありますが、夏の赴任以来うどんを朝から食べてみたり、しょうゆ豆や白味噌あんもち雑煮が好物になったり、オリーブや瀬戸内海産物の海産物、和三盆をたしなみつつ、突貫的に香川人になろうと心掛けております。事実、オリーブ色に染まる覚悟で過ごしているのですが、幸い、讃岐の水と空気は自分の性分に合っており、今後は香川大学と香川のために精進し、麻酔学の面白さを学生と研修医にしっかりと伝え、附属病院での医療と研修内容が充実していることもアピールしようと思っております。研究面では香川から日本、世界へと情報発信することを目標としております。

私は高校までは埼玉県で過ごしたのち、群馬大学入学後は主に群馬県で過ごしてきました。群馬県は赤城、妙義、榛名の三名山に囲まれ、さらには遠くには雄大な浅間山もあり、山を見て方角が分かりました。一方で群馬は“海無し県”であったため、香川の静かな瀬戸内の海、所々に島のように浮かぶ里山の風景には、毎度見るたびに美しいと感嘆しています。群馬ではシャッター街と化して久しいアーケード街ですが、高松市内では街に活気があり、風光明媚な自然とのバランスが素晴らしいです。高松港近辺の大規模開発には高級外資系ホテル誘致の噂もあります。果たして高松に超高級ホテルが出来たとして本当に泊まるお客さんがいるのかどうか疑問だったのですが、先日少し直島に行ったところ、観光客の8割方が外国人であり、店員も既に英語で会話していたことを実際に見聞き、高

松がグローバル都市へ発展する未来が見えました。わざわざ世界各地から不便な直島を最終目的地として来日しているという事実は並大抵のことではありません。“うどん県”といった大胆なアピールで知られる香川県の努力もさることながら、アートの力で世界中から人を惹きつけているポジショニングの巧さを感じます。

そのような香川のポジショニングを背景に、私は香川大学の麻酔・ペインクリニック科・集中治療部にも同様に大きな可能性を感じております。前任地の群馬大学麻酔科は医局員が150名を越える大所帯であり、それに比べれば香川麻酔科は確かにまだ小さな医局かもしれませんが、しかし数や大きさではなく、香川麻酔科には細やかさや「質の高さ」があります。例えば先代の白神豪太郎教授時代から取り組んでおられました、患者さんへの手厚いケア、特に疼痛緩和に対する技術の高さに驚かされました。手術侵襲によってどうしても生じてしまう患者さんの痛みに対して、手術室から病棟あるいは集中治療部へと、継ぎ目なくケアが充実している現場を目の当たりにして、その技術力の高さに感銘を受け、香川麻酔科において最高の医療水準を満たした「安全で快適な麻酔」を提供していることに誇りを感じます。

もうひとつ、私が赴任して感じた香川麻酔科の特徴に雰囲気の良いところがあります。学会や研究会等で、全国のいろいろな麻酔科医局を見聞きしてきましたが“雰囲気が良い”医局は珍しい部類に入ります。一般論として、組織集団の雰囲気や文化というものは一朝一夕に作られるものではなく長年にわたり醸成され、そして組織を構成する個人ひとりひとりに影響を与えます。先日、麻酔科ホームページに“麻酔科医のwell-being（いかに幸せに生きるか）”というテーマで挨拶文を書いたのですが、高い社会性を持ち“群れる動物”である我々人間にとって、個人が幸せになれるかどうかは、どの組織に属するかということが重要です。同じく一般論として、ある組織のひとりひとり個人と会話をしたときの印象が、ひとつの組織全体に通じる印象として感じられることがあります。個人と組織の双方から

一貫してにじみ出てくる印象とは、組織の無形価値（ブランド）とも言い表せるものでしょう。従って、香川大学麻酔科が持つ“雰囲気良さ”という無形価値についても、しっかりと継承し、願わくは発展させていく所存です。

最後となりましたが、歴史と伝統ある香川大学医学部麻酔学講座を引き継ぎ、時代に合わせた先取の気性、常に一步先にあるチャンスを掴んでいこうと思っております。讃樹會の皆様、今後ともどうかお力添えを頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

略歴

平成4年	埼玉県立浦和高等学校卒業
平成10年	群馬大学医学部卒業 同附属病院 研修医（麻酔科）
平成12年	日本赤十字社医療センター 医員（麻酔科）
平成13年	武蔵野赤十字病院 医員（麻酔科）
平成15年	群馬大学医学部附属病院 医員（麻酔科）
平成16年	自然科学研究機構 生理学研究所 統合生理研究部門 出向（4 - 6月）
平成19年	群馬大学大学院医学系研究科麻酔神経科学専攻博士課程（三年次）修了
平成19年	群馬大学医学部医学科 助教（脳神経発達統御学講座麻酔神経科学）
平成26 - 27年	群馬大学医学部医学科 助教（麻酔科 医会長）
平成28年	群馬大学医学部附属病院 講師（麻酔・集中治療科）
令和5年	香川大学医学部麻酔科学講座 教授（麻酔・ペインクリニック科）



医学部長就任に寄せて



讃樹會名誉会長 濱本 龍七郎
(昭和61年卒・1期生)

会員の皆様 明けましておめでとうございます。

コロナ感染症が、5類となるも、まだまだ実臨床では感染患者は減少しているわけではありません。また、ガソリン、食品、電力など物価高が目立ち、国民を苦しめています。香川大学は、2023年10月より、笈学長が退任され、上田夏生新学長が就任されました。医学部は、西山成先生（8期生）が医学部長に、門脇則光先生が病院長二期目に就任されました。卒業生にとっては、大変うれしい事です。

西山先生は、香川医大出身、初の教授であり、薬理学の教授であります。研究力、情報力、コラボレーション力等、非常に優秀な先生であり、人間力も素晴らしいものを持っています。10年間に一度、出るかどうかの逸材でございます。医学部の再開発、医学部の講座再編など様々な課題があり、それを乗り越え、発展させる唯一無二の人であると思います。

私は、一期生として卒業して、卒業と同時に会長となり12年間、初代会長を務め、その後、名誉会長となり、約40年近く同窓会の立ち上げと発展に寄与してまいりました。新設医大とはいえ、母校出身教授は19名誕生。今や、医学部の主力メンバーが輩出されております。次期病院長も母校出身から出ることも期待され

る所であります。

しかし、その反面、母校出身教授の内、舛形尚総合内科教授（1期生）、正木勉消化器・神経内科教授（5期生）が、3月定年されます。

早いもので、母校出身教授が平成19年（2007年）に誕生し、本年、初めて停年を迎える事実もあります。

裏返せば、それだけの時間が経過し、またそれだけ卒業生が成長した証明だと思えます。

私が、今、考える事は、卒業生が3719名となり、香川県にて1000名の卒業生が活躍されています。香川県の医療に、大いに貢献しているものと思えます。今後、その基盤を大事にし、増々発展させるのはどうしたらよいか、大きな課題でございます。

香川県の研究、臨床のトップとして、また教育機関として、努力が必要と思えます。

さて、讃樹會は大学の援助団体として設立され、生みの苦しみはあったものの、今や大きな団体となっています。その代表としての会長は、医大勤務の先生も、その候補の1人となる時代であり、世代交代を迎えています。但し、会長は2年一期、2期までで交代し、新しい発想でやっていただきたいと思えます。

益々の発展を期待いたします。

ニュースの窓

組織・人事

2023年10月1日付のご就任をお知らせします。

【医学部執行部】

(敬称略)

役職	氏名	所属
医学部長	西山 成 (8期生)	薬理学教授
副医学部長 (医学科教育担当)	日下 隆 (6期生)	医学科長 小児科学教授
副医学部長 (看護学科教育研究担当)	松本啓子	看護学科長 在宅看護学教授
副医学部長 (臨床心理学科教育研究担当)	竹森元彦	臨床心理学科長 心理療法実践学教授
副医学部長 (大学院教育・研究担当)	桑原知巳	分子微生物学教授
副医学部長 (入学試験担当)	三木崇範 (6期生)	神経機能形態学教授
副医学部長 (再開発・広報・財務担当)	星川広史 (5期生)	耳鼻咽喉科学教授
副医学部長 (評価・広報・社会連携担当)	金西賢治 (8期生)	周産期学婦人科学教授
副医学部長 (ダイバーシティ・働き方改革担当)	塩田敦子	健康科学教授
副医学部長 (総務担当)	横川利子	事務部長

【医学部附属病院執行部】

役職	氏名	所属
病院長	門脇則光	血液・免疫・呼吸器内科学教授
副病院長 (診療・医療安全担当)	杉元幹史 (3期生)	泌尿器科学教授
副病院長 (研究担当)	横井英人 (11期生)	医療情報学教授
副病院長 (経営・評価担当)	堀井泰浩	心臓血管外科学教授
副病院長 (教育・広報・地域連携担当)	岡野圭一 (7期生)	消化器外科学教授
副病院長 (医療の質管理担当)	阿部 慈	看護部長
副病院長 (総務担当)	横川利子	事務部長

香川大学医学部附属病院 2023年度の医師臨床研修マッチング結果について

卒後臨床研修センター
センター長 安田 真之
(平成9年卒・12期生)

令和6年度から医師になる医学科生らが臨床研修病院を選ぶ「2023年度マッチング結果」が、10月26日に公表されました。

本院のマッチ者数は、MANDEGANプログラム(15名)および小児科プログラム(2名)、あわせて計17名でした。

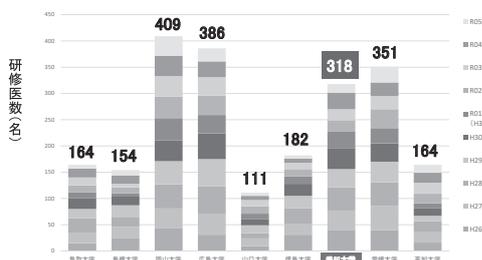
本院への想い・期待を抱いてくれた皆さんが、来春より本院で研修開始予定であることを大変嬉しく思います。

令和2年度から、卒後臨床研修制度が大幅に変更となりました。必修診療科での研修期間が増え、新たに外来診療・チーム医療の実践など必修項目も設定されています。また、医師だけでなく看護師等の多職種による研修医評価も必要となりました。院内スタッフの皆様にも、研修医指導へのご理解とご協力をお願いしております。

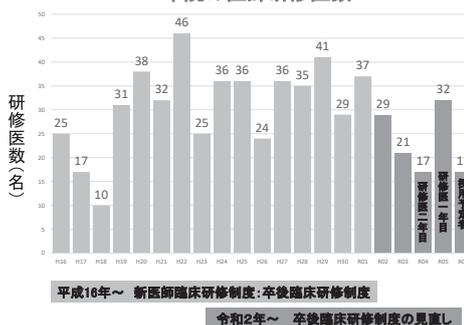
本年度のマッチング結果は、地方国立大学病院では、研修医確保が大変厳しい状況に陥っており、地域医療を担う医師教育、育成に多大な影響を及ぼすことが危惧されております。今後、多くの医学生からキャリアアップのファーストステップとして本院が選択される為に、医療の社会的ニーズの変化に対応した研修を提供することが、さらに重要となると考えています。

医学部教育センター、臨床教育研修支援部が一気通貫体制で医師養成に臨むだけでなく、地域全体のムーブメントとして皆様にも研修医教育に関わって頂き、研修医が医師としてのキャリアアップに夢を持てる大学病院でありつづけることが大切と考えます。讃樹会会員の皆様におかれましても、引き続き研修医育成にお力添えの程よろしくごお願い申し上げます。

中国四国9国立大学病院 大学別
医師臨床研修マッチング者数の累計(過去10年間)



本院の医師研修医数





冬の国際医学セミナー ブルネイ大学医学生の受け入れ

コロナ感染症による渡航制限のため、中止されてきたブルネイ大学医学部学生による冬の国際医学セミナーが4年ぶりに開催されました。

2023年12月11日に開講式を皮切りに、各講座での実習や放課後には弓道、空手、茶道などのアクティビティを通じて日本文化を体験いたしました。休日にはうどん作り体験、金刀比羅宮参拝、栗林公園散策などを通じて香川大学医学部学生とも大いに交流をいたしました。プログラム最終日には閉講式とfarewell partyが盛大に行われ、今後の更なる相互関係の強化を確認することができました。

長らく中断してきた国際交流の再開は、本学学生たちにとっても大変刺激となったようです。これらの交流再開は讃樹會会員の皆様からの温かいサポートの賜物であり、感謝申し上げます。今後ともご理解ご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

(医学部国際交流委員 (ブルネイ担当) 安田真之)



開講式



閉校式



farewell party



第13回讚樹會市民公開講座開催報告

2023年11月25日

「すっきりわかる！泌尿器科の病気」

- ・前立腺がん：正しい知識で正しい治療をしよう
- ・ロボット手術ってどうなの？
- ・すべての男性の悩み、男性更年期

講師 香川大学医学部泌尿器科学 教授 杉元 幹史先生

2023年11月25日（土）16：00から17：00に、第13回讚樹會市民公開講座が高松国際ホテルにて、65名の市民をお迎えし開催されました。まず開会の挨拶を名誉会長濱本が致しました。続いて座長として会長平川栄一郎先生が講師の杉元幹史教授の経歴を紹介されました。

そして杉元教授が、演題「すっきりわかる！泌尿器科の病気」として、①前立腺がん：正しい知識で正しい治療をしよう ②ロボット手術ってどうなの？ ③すべての男性の悩み『男性更年期』の3項目に沿ってご講演を開始されました。

まず前立腺がんについては、日本では年間約95,000人が前立腺がんと診断がされており、男性癌で最多です。前立腺がんが増加している背景には、食生活の欧米化や人口の高齢化もありますが、やはり大きな要因はPSA検査の登場です。PSA検査の普及により早期の前立腺がんが非常に多く発見されるようになりまし

た。しかしそこで重要なことは、過剰治療を避けることです。残念ながらPSAは特異度が低く、悪性度を正しく判定できるマーカーではありません。命に関わらないおとなしい癌まで発見してしまう、つまり過剰診断を助長するという欠点があります。現実的な対策として、まず癌を見つけ、本当に治療の必要な癌だけ放射線や手術で治療する、それ以外は様子を見るという方法が望ましいと考えます。その過剰治療を避けるための唯一現実的な方法が監視療法であると述べられました。監視療法は香川大学が日本の中心となり研究が進められ、現在までに1,200人以上がプログラムに参加いただいております、わが国最大のデータベースとなっていると報告されました。

次にロボット手術についてのお話がありました。ロボット手術とは、いわゆるマスタースレイブ式の遠隔手術のことです。日本で600台以上が稼働しており、保有台数は世界2位です。日本ではロボット手術はま



講師 杉元幹史先生



座長 平川栄一郎会長

開会・閉会の辞
濱本龍七郎名誉会長

ず泌尿器科から始まりました。明るい拡大視野、自由度が高いロボットアームで、手の震えを吸収し、緻密な手術が可能になります。また座って手術を行えるため、外科医も楽です。さらに教育効果も高く、ロボット手術には多くの利点があります。香川大学附属病院では現在2台のダヴィンチが稼働しており、泌尿器科のみならず、消化器外科、呼吸器外科、婦人科、耳鼻科などでロボット手術を行っているとのことでした。

続いて男性更年期についてのお話でした。男性更年期とは、加齢とともに男性ホルモン（テストステロン）が減少すること

によって発汗、ほてり、鬱、疲労感などが起こる症状症候群です。女性の更年期が有名ですが、思いのほか、男性更年期症状に悩まれている患者さんも多く、そのような場合には是非、泌尿器科医に相談してほしいと述べられました。

最後に香川大学泌尿器科の目標は、世界標準の医療を過不足なく理性的に提供することであり、過少・過剰治療に偏らない適切な医療（標準医療）を患者さんに提供することだとまとめられました。

3名の方から質問があり、杉元先生が丁寧な説明をされ、講演が終了しました。

閉会の辞にあたって、濱本名誉会長が、本日の参加者にお礼を述べ、香川大学医学部の卒業生約1000人が香川県で医療を担っていることをお伝えして、今後の香川大学医学部の発展を祈念して終了致しました。

（名誉会長 濱本龍七郎（昭和61年卒・1期生））



会場風景



左から平川会長、杉元教授、濱本名誉会長

寄稿

令和5年9月9日、寛善行学長香川大学学長退任記念祝賀会に出席して

讃樹會名誉会長 濱本 龍七郎
(昭和61年卒・1期生)

令和5年9月9日(土)17時半より花樹海にて、寛善行学長香川大学学長退任記念祝賀会が開催され、司会の香川大学医学部泌尿器科学教授杉元幹史先生(3期生)が開会を宣言されました。

来賓祝辞として、最初に片岡郁雄理事・副学長が、学長の教育、研究の業績を称えられ、次に上田夏生副理事(医学部教授)が学長と同じ年に教授に就任、医学部時代の交友関係、そして今回、新学長へ導いていただいた事への感謝を述べられました。三番目に私(濱本)が「学長の決断と実行力のすばらしさ、そしてそれがベスト&パーフェクトである事、地頭力の良さとマネージメント力、人心掌握力など、最高の学長である」と述べ、その後、眞鍋光輝理事・副学長の御発声にて乾杯があり、祝宴が開始されました。

大学執行部、泌尿器学同門会正会員、賛助会員他関係者など、86名の参加があり、なごやかに祝宴が進行する中、理事・副学長の今井田克己先生、片岡郁雄先生、眞鍋光輝先生、佐久間研二先生、国分伸二先生、副学長の城下悦夫先生、松木則夫先生、吉田秀典先生、門脇則光先生(医学部附属病院長)、根ヶ山和幸監事、川池秀文香川県議会議員の先生方が壇上に上がり、学長から各々の先生方一人ずつに功績を称えられ、学長御令室様より花束が贈呈されました。



寛 善行学長

また、会を代表して、杉元教授より、寛学長夫妻に記念品(57年ぶりの香川公演となるベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の音楽鑑賞券)が贈られました。

最後に寛学長より、他の国立大学と比較して大幅に遅れていた大学改革を軌道に乗せ、加速化するために、6学部の執行部との折衝、産学官連携、イノベーションセンターの設立など精力的に動き、皆様への協力を仰いだ結果、肩を並べることとなるなど、在職中の皆様のご支援ご協力に感謝を述べられました。

中締めとして同門会長の國富公人先生が万歳三唱をされ閉会となりました。



左から上田夏生副学長、寛 善行学長、濱本



讃樹會名誉会長 濱本龍七郎

編集注：文・写真は令和5年9月9日現在の役職を記載させていただいています。



寄稿




同窓の皆様には香川医科大学・香川大学医学部時代にお世話になった先生方の最近のエピソードをお知らせします。

◆第一解剖学 初代教授 島田眞久先生

島田眞久先生は、香川医科大学第一解剖学の初代教授としてご就任後、大阪医科大学に異動され、同大学学長をお勤めになられました。昨年10月、島田先生の解剖学関連の蔵書59冊を本学図書館医学部分館に寄贈頂きました。数十年単位では変わらないヒトの構造－解剖学の教科書はいつまでたっても使えます。むしろ昔の教科書は線描が多かった為、構造の特徴をよくとらえて記されています。図書館に設置していますのでどうかご利用ください。

20年ぶり位にお会いしました島田先生は、私を見るやいなや「やあー、りっぱになったな」とお声掛け下さいました。本当に嬉しいお言葉でした。同窓会誌など様々なところで母教室のことや卒業生のことを気にか



島田先生寄贈本

島田眞久先生



け、見守って下さってこられたことを伺い心強く感じました。学生時代の私は、基礎医学研究者に憧れていました。夕方、実習室の前の煉瓦の長い廊下を夕日に照らされて、さっそうと帰宅される島田先生のかっこいいお姿は今でも鮮明に覚えている旨お話ししました。当時の眼光鋭い解剖学者島田教授は今でも同様でしたが、会話の間に見える優しい眼差しは、人間の器の大きさを物語っていました。どうか、これからも健康に気を付けられお過ごしください。

(6期生 神経機能形態学教授 三木崇範)

◆医学部長として感謝状を贈呈しました

小児科学伊藤進元教授、法医学故飴野清元准教授に感謝状を贈呈しました。

伊藤先生と飴野先生が、長年に亘りキャンパス内・職員宿舍周囲や大学周辺の環境美化活動にボランティアとしてご尽力されている／されていたことは同窓の皆様にはご存知の方も多と思います。土日や休日を中心にお一人で黙々と続けておられる姿勢は、香川大学医学部を我が事と想っておられる証です。このお気持ちと労に感謝するために令和5年9月に感謝状を贈呈しました。
(前医学部長 三木崇範)

◇小児科学 伊藤 進先生

伊藤進先生は2代目の小児科学講座教授として活躍され、2014年に退職後は、香川大学名誉教授、小児科客員研究員、診療協力医師として継続して貢献して頂いています。特に小児科の臨床実習において、医学科4-5年生を対象に自らの小児科医としてのご経験を基に講義を毎週、継続して行い学生らを激励して下さっています。同時に医大前官舎の清掃を毎朝6時頃から休まず行われ、居住している方々から、いつも感謝されています。伊藤先生は、



菜根譚の「道徳に棲守する者は、一時に寂寞たるも、権勢に依阿する者は、万古に凄凉たり。達人は物外の物を観じ、身後の身を思う。寧ろ一時の寂寞を受くるも、万古の凄凉を取ること母れ。」とあるように、自らの道徳（真理）を大切にされ、その言葉を具現化するかのよう、黙々とお一人で清掃されています。会話でのダジャレが多く、時々その意味が難解で理解に苦しむ場面もありますが、教員や学生達からとても愛された存在です。今後も継続して、私たちの心の拠り所として、ご指導をお願いしたいと思います。いつも本当にありがとうございます。

(6期生 小児科学教授 日下 隆)

◇法医学 飴野 清先生

飴野 清先生は法医学講座の准教授として活躍され、2014年に退職後も非常勤講師として法医学の実務としての薬物分析を中心に、継続して貢献して頂きました。また、法医学の講義の一部も継続していただいています。休日には大学構内のみならず、大学の周辺でも清掃をされていました。学生指導とおなじく、「やってみて、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、ヒトは動かじ」(山本五十六)を体現するように、黙々とお一人で清掃されていました。また、卒業生の活躍にも関心を持たれており、新聞などで取り上げられていると、必ず教えてくださいました。退職後はマイペースで、とお考えだったかと思いますが、病に倒れたことで、私たちの感謝の気持ちを直接お伝えする機会を失ったことは残念でなりません。なお、感謝状は、奥様にお渡しいただきました。今後も私たち香川大学医学部のことを見守っていただけたらと思います。



(7期生 法医学教授 木下博之)

理事会議事録

令和5年第3回理事会議事録 令和5年12月4日 (WEB)

当日参加11名及び委任状29名による計40名の参加となり、全理事67名の過半数（半数34名）により理事会が成立した。他に執行部、特別役員8名の参加があった。

1. 第18回定期総会の日程及び記念講演会について

日程は5月11日（土）15：30、会場は医学部臨床講義棟1階に決定した。

記念講演会の講師は10月に医学部長に就任された西山成先生にお願いするという執行部案に決定した。総会のタイムスケジュールは、14：30から会長選挙公開開票、15：30～16：10 定期総会 16：30～ 記念講演会（30分～1時間程度）とする。形式は対面で行う。懇親会は、記念講演の終了時間に合わせて開始時間を決定する。場所は検討中。

2. 国外留学助成金の審査・決定

令和5年度第2回国外留学助成金の申請は、阪野太郎先生（平成27年卒）1件であり、西内学術局長により1次審査を経て規定通りの採択で問題ないことが平川会長から報告された。これを受けて理事会による2次審査が行われ、1件の限度額である250,000円満額が交付されることが決定した。

3. 県内卒業生による懇親会開催の件

10月から新体制となった医学部と附属病院の執行部の就任挨拶も兼ねて、医学部や附属病院の状況を讃樹會会員にお伝えする機会を持つということで、医学部主催で県内の卒業生対象に懇親会の開催をしたく、案内に際しては同窓会のネットワークを利用し協力をいただきたいと星川広史副医学部長から説明があった。

懇親会の開催と、同窓会が積極的に協力していくことについて、理事会から賛同があり承認された。懇親会の開催時期等詳細は、調整後、アナウンスすることとなる。

4. 医学部長就任挨拶の一斉メール配信について

この件につき、西山成医学部長から説明があった。「医学部が50周年を迎えようとしており、老朽化し手狭になった校舎の再開発について文部科学省の承認があり、6年間かけてようやく改修工事が行われることになった。文部科学省からの資金の不足分に対し、香川大学本体、県など様々なサポートをいただくが、それでも3億円から4億円が不足しており、寄附を集めなければ借金することが必要となる。しかしこの機会を香川大学医学部、香川医科大学をリニューアルするチャンスと考えており、医学部職員はもちろん、在校生の保護者など関係者の皆様に寄附をお願いすると共

に、同窓会会員の皆様にも寄附をお願いしたい。については、同窓会に協力いただき、会員への『医学部開講50周年へむけて！記念特定基金趣意書』のパンフレットの郵送と、メール一斉配信に当たり、個人情報の利用という観点から理事会で審議いただきたい。パンフレットは2月の同窓会報に同封し、その後、メール配信を行いたい。何回も送ることになる際には、その都度、理事会で審議して承諾を得て送るようにしたい。」

これについて理事の賛同があり、承認された。

5. 学生支援（競争的資金）追加審査

8月の第2回理事会で2件の申請が採択されているが、IFMSAKから令和6年2月に来学する留学生との交流も含めて活動支援の希望があり追加申請があった。年間5件の予算で3件の残り枠があることと、学生支援という本事業の目的から、追加交付が承認された。

6. その他

①三木崇範教授から、島田真久名誉教授から医学部図書館に蔵書の寄贈があり、その折の島田先生と旧交を温めたことや、医学部にまつわる貴重なエピソード等について、次号同窓会報に寄稿いただけることとなった。

②平川会長から、「医学部から50周年記念特定基金への寄附の依頼が団体としての讃樹會に対してもあり、寄附を検討したいと考えている。また、図書館前の中庭に新棟が建設され、その2階に学生のみならず卒業生も自由に交流できるホールが予定されており、例えばホール名を讃樹會の名前を入れる提案も出ている。寄附の額など、次回の執行部会や理事会で、あるいは来年度総会に向けて検討していければと考えている。そのためにも、予算の不足額や、寄附の状況などの具体的な情報の共有をお願いしたい」との話があった。

国外留学助成金 受賞の言葉

令和5年度第2回国外留学助成金

阪野 太郎 (平成27年卒) 東京女子医科大学病院 泌尿器科

留学先機関：Cleveland Clinic Lerner Research Institute,
Inflammation & Immunity

留学期間：2024年4月～2027年3月

研究課題：Role of chemokines in acute allograft rejection,
Intra-allograft inflammation



【謝辞】

この度は国外留学助成を頂き、讃樹會の皆様にご心より御礼申し上げます。私は医学生時代より腎移植に興味があり、東京女子医科大学泌尿器科に入局し大学病院とその関連施設にて泌尿器科学、腎移植、透析医療を学んで参りました。移植領域において国外では免疫寛容や異種移植などの研究が盛んに行われており、本年度に初めて参加した米国移植学会ではそのスケールの大きさとエネルギーに大変刺激を受けました。兼ねてより米国留学の希望があり、Cleveland Clinic Lerner Research Instituteにご縁があつて留学を決心しました。Robert Fairchild氏の元で心移植または腎移植マウスのグラフト拒絶モデルを使用し、抗体関連型拒絶反応に関与するケモサイトカインの同定と役割の解明を行います。この場をお借りしまして、本助成のご推薦を頂きました国立がん研究センター東病院大腸外科・西澤祐史先生、東京女子医科大学八千代医療センター泌尿器科教授・乾政志先生に心より感謝申し上げます。微力ながら今後の移植医療の発展に寄与できれば幸いです。

2023年度研究助成金/研究奨励金 受賞の言葉

研究助成金受賞のことば

香川大学医学部 小児科

中村 信嗣 (平成16年卒・19期生)



この度は、R5年度讃樹會研究助成金を頂きまして、誠にありがとうございました。今回で讃樹會助成金受賞は2回目となりますが、現在、私たち香川大学小児科が進めている「新生児低酸素性虚血性脳症に対する水素ガス治療研究」を更に発展させる上で、本助成金は非常に大きな原動力となっておりますことを重ねて感謝いたします。また、これまでご指導を頂きました日下隆教授、上野正樹教授、三木崇範教授の先生方にも厚くお礼申し上げます。

新生児低酸素性虚血性脳症（HIE）は予後不良な疾患で、本邦でも年間500人程度が治療を要します。しかし、HIEの標準治療である低体温療法（TH）を行っても、その半分近くが長期的神経学的に予後不良であることが現状であるため、更なる予後改善のための脳保護治療法の開発が必要です。

私達は以前より、分子状水素の低酸素虚血後の抗酸化、抗炎症作用に着目し、HIEに対しても効果を発揮すると考え、研究を行ってきました。そこで、私達が独自に開発した「長期生存可能且つ一定の病理組織学的脳障害を認める新生仔豚仮死モデル“Kagawa model”」を用いて、THとの水素ガス併用は、TH単独に比して、運動機能の回復、特に歩行可能となるまでの回復が早く、病理組織学的には大脳皮質における神経細胞壊死が有意に軽減することを報告しました（Htun Y., et al. Sci Rep 2019）。また、その脳保護メカニズムの1つに、血管内皮障害軽減効果があること

も報告しました（Htun Y., et al. Sci Rep 2023）。更にTHと水素ガス併用はTH単独よりも、脳循環酸素代謝変化の改善（Nakamura S., et al. Sci Rep 2023）や、痙攣発症の低下、痙攣持続時間の短縮（Tsuchiya T., et al. Under review）を認められたことから、これらは血管内皮障害軽減効果（血管性浮腫の軽減）を反映し、水素ガスの治療効果判定には近赤外分光装置や脳波を用いることが有用であると考えました（これらの研究成果は前回の本助成金のご支援を頂きました）。

そこで今回の研究テーマは、「臨床応用にむけた新生児仮死児に対する水素ガス吸入療法治療プロトコルの確立 ～脳循環酸素代謝・脳波計測を用いた治療効果判定方法を用いて～」とし、これまで同様、新生仔豚仮死モデルを用いて、上記の近赤外分光装置と脳波を用いた効果判定方法と病理組織を用いて、「開始時期、投与濃度の違いによる治療効果」を判定し、「HIEに対する脳障害軽減効果を発揮する最適な水素ガス療法のプロトコルの確立」を研究課題の最終目的とすることとしました。そして、本研究結果を基に、水素ガスを用いたHIEに対する医師主導型治験に進み、HIE児の予後改善に少しでも寄与できたらと考えております。

最後に、これまでに多くのご支援を頂きました讃樹會会員の方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。今後も引き続き、ご支援、ご指導のほど、よろしく願いいたします。



研究助成金受賞のことば

香川大学医学部附属病院 消化器神経内科

大浦 杏子 (平成22年卒・25期生)



この度は令和5年度讃樹會研究助成金に採択していただき、誠にありがとうございます。私は平成22年に香川大学医学部を卒業後、本学消化器・神経内科に入局し、肝臓内科医として臨床経験を積み、研究活動を行ってきました。未だ予後不良とされるアルコール性肝疾患および肝細胞癌の治療成績向上につながる研究がしたいと考え、「アルコール性脂肪肝炎の進展と発癌制御に関わる免疫微小環境の解明と細胞治療への応用」を本研究テーマに選ばせていただきました。この場をお借りしまして、讃樹會関係者の皆様および御審査いただきました先生方、本研究の草案に関わり、ご指導いただきました先生方に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

本邦におけるアルコール総消費量は若干の減少傾向にあるものの、女性の飲酒率、大酒家や問題飲酒者数は増加傾向であり、肝疾患に占めるアルコール性肝障害の比率は2000年以降で約4倍に増加していることが報告されています。さらにアルコール性脂肪肝炎 (Alcoholic Steatohepatitis; ASH) は発癌までに適切なサーベイランスや治療介入が実施されておらず、肝線維化が進行しており、診断時には進行癌であることが多く、依然予後不良な疾患です。ASHにおける肝

線維化・肝発癌による病態進行は大きく炎症反応に左右され、腸内細菌叢に由来するPathogen associated molecular patternsを介した肝マクロファージの活性化による経路と、細胞死によって放出されたDamage associated molecular patternsを介してToll-like receptor (TLR) やInflammasomeが活性化する経路が想定されていますが、詳細な機序は未だ明らかではありません。Myeloid differentiation factor 88 (myd88) はTLRやIL-1ファミリーサイトカイン受容体の下流でシグナルを伝達するアダプター蛋白質であり、本研究ではアルコール投与下におけるマクロファージ特異的myd88欠損マウスと肝細胞特異的myd88欠損マウスでの、ASH進展と発癌制御機構を明らかにしたいと考えています。さらに当研究室は消化器疾患におけるmicroRNA (miRNA) に関して多くの研究業績があり、マクロファージによるASHの進展・発癌制御機構に関わるmiRNAを同定し、最終的にはmiRNAをターゲットとした治療戦略の可能性についても検討したいと考えております。

最後になりますが、この助成金を有効に活用し、良い研究成果が報告できますよう、日々精進してまいりますので、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。



研究奨励金受賞のことば



日本医科大学 血液内科

阪口 正洋 (平成23年卒・26期生)

このたび令和5年度讃樹會研究奨励金を賜りましたことはこの上ない喜びであり、心より深謝申し上げます。私は平成23年に香川大学を卒業後、故郷の大阪府で初期臨床研修を過ごしました。その研修期間に造血幹細胞移植治療に触れ、まだまだ克服すべき課題が多いことに刺激を受けて血液内科医になりました。そして国内有数の造血幹細胞移植施設である東京都立駒込病院で4年間の後期研修を過ごし、当時の血液内科部長で香川大学の先輩である大橋一輝先生(昭和62年卒)に直接のご指導をいただくこともできました。そこで難治性白血病の症例を幾度となく経験して学術的な問いを抱き、その厳しい現状を少しでも打開したい思いから、白血病の遺伝子解析分野に力を入れている日本医科大学 血液内科へ2017年に入局し現在に至っています。そして、欧米ガイドラインに基づく急性骨髄性白血病(AML)の予後層別化システムの日本人患者集団での検証等、継続的に世界へ情報発信をさせていただいております。

TP53変異を有するAMLは寛解達成率が極めて低く予後不良であり、長期生存のためには完全寛解期での同種造血幹細胞移植を確実に実施することが重要です。変異型TP53は機能喪失型であるため、新規治療法の開拓は容易ではありません。この低い寛解達成率の改善・向上が喫緊の課題であり、ここに着目して私は研

究を開始しました。

TP53変異がどのように薬剤耐性を獲得しているのか解析するため、まずAMLの複数の細胞株(TP53野生型)でCrisper-Cas9システムを用いてTP53ノックアウト細胞を作成しました。これらの細胞株にAMLの標準治療薬のひとつでアドリアマイシン(ADR)処理後の生存率を比較検討したところ、TP53ノックアウト細胞において従来観察されるアポトーシス誘導が顕著に阻害され、その後の検証で抗アポトーシス因子であるMCL-1の発現亢進が観察されました。しかしMCL-1は正常細胞でも強く発現しており、組織の再生・維持にとっても重要であるため、単にMCL-1阻害剤であるS63845の投与は重篤な副作用出現の懸念があります。このためMCL-1の発現誘導をいかにして制御するかに着目して、日々研究を行っております。紙面の都合上、詳しく記述できませんが、高度免疫不全マウスの飼育環境も大学に整備していただくことができ、研究が進めばヒト化マウスを用いた様々な検証がin vivoで実施できる状況になっております。

今回頂いた奨励金は大切に有効活用させていただきます。この研究が難治性白血病で苦しむ患者さんの未来を変える一助になることを目指すと同時に、香川大学医学部・讃樹會をさらに盛り上げられたらと思っております。今後とも宜しくお願いします。

学会開催報告

《第141回日本薬理学会近畿部会・第6回日本薬理学会中国四国地方会 ・第6回黒潮カンファレンス合同学会》

日時：2022年7月1日－3日

薬理学 西山 成
(平成5年卒・8期生)

讃樹會の皆様におかれましては、平素より大変お世話になっております。去る2022年7月1日（金）から3日（日）の3日間にわたり、第141回日本薬理学会近畿部会・第6回日本臨床薬理学会中国四国地方会・第6回黒潮カンファレンスの合同学会を讃樹會のサポートのもとで開催いたしましたので、その模様を簡単に報告申し上げます。

新型コロナウイルス感染症が蔓延する中、開催自体が危ぶまれましたが、日本薬理学会近畿部会と日本臨床薬理学会中国四国地方会を完全WEB開催にて、黒潮カンファレンスを香川大学イノベーションデザイン研究所での現地開催にて、万全の感染対策のもと実施いたしました。人生100年時代となる超高齢化社会において必要となる「分野を超えた新しい研究分野の創出」は、まさに香川大学が目指している「創発研究」の概念に一致するものでありますことから、テーマを「創発研究のススメ」とさせていただきました。香川大学理事・副学長であります片岡郁雄先生に本合同学会を統括する大会顧問をお願いし、日本臨床薬理学会中国四国地方会は医学部附属病院・薬剤部長の小坂信二教授に、黒潮カンファレンスは香川大学創造工学部の石丸伊知郎教授にそれぞれ副会長をお願いして、3日間合計で500名以上のご参加をいただきました。



▲受付風景：現地開催は香川大学イノベーションデザイン研究所にて、万全の感染対策のもと実施されました



▲現地開催風景：香川大学イノベーションデザイン研究所における最初の学会開催となりました。大変熱い議論が行われました。

第141回日本薬理学会近畿部会では、学会の原点に戻り、一般口演の一般勝負で約60演題のご発表をいただき、若手によるコンペも実施され、数名の先生に優秀発表賞が授与されました。一方でその他2つの学会では大変特色のあるシンポジウムが企画され、日本薬理学会中国四国地方会では香川県病院薬剤師会との共催で「COVID-19禍における臨床試験支援業務」と「多職種連携による薬学的課題への取り組み方～入院・外来・地域をつなぐために～」、黒潮カンファレンスでは、「社会実装・展開に向けた独自研究」と「次世代異分野研究からの挑戦」と「ヘルスサイエンスに向けた独自研究」とを実施しました。特に黒潮カンファレンスでは、香川大学の誇る特徴のあるご研究を多くの先生方にご講演賜りました。ご発表いただきました先生方におかれましては、この場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます次第でございます。

以上、讃樹會のサポートのお陰様をもちまして、大変盛會に大会を終了することができました。本會での知識の交流は創発研究の創出に直結するものであったことを確信しておりますが、引き続き社会への貢献を視野に入れた研究・教育・運営活動を続けてまいり所存ですので、今後とも何卒ご指導賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

支部会・懇親会

関東支部会開催報告 ◆2023年11月19日◆

離れても心はひとつの同窓生

松尾 寛 (平成6年卒・9期生)

2023年11月19日横浜のホテルニューグランドで第22回讃樹会関東支部会が開催され盛会のうちに終わりました。その様子につき感想を交えご報告させていただきます。

関東支部会会長内山順造先生 (H3卒) 司会のもと香川大学からは医学部長に就任された西山成教授 (H5卒)、副医学部長星川広史教授 (H2卒) のご来席がありました。

西山教授からは開講50年を迎えようとしている現在の建物が老朽化し教育、研究に支障を来している状況を踏まえ先端医学研究棟の新設を中心とした再生プロジェクトのご紹介がありました。また卒業生は3700名を超え、各方面で活躍されている一方で医学部再編の淘汰にも晒されており、それに耐え得る独自性を創

出すべく尽力したいとの熱い抱負を述べられました。最後に「卒業生同志のご縁を大切にしていきたい」という母校愛溢れるメッセージがありました。星川教授からも同様に開講50周年事業のご紹介があり西山教授と共に全力で取り組み母校を盛り上げたいとの心強いお話がありました。

東京医大教授伊藤正裕先生 (S62卒)、弘前大学教授中村和彦先生 (H2卒)、日本医大教授岩部真人先生 (H15卒) から同門会を更に盛り上げましょうとの話がありました。とくに岩部先生から今後更に参加者が増えるように組織的に声かけなどを行い頑張りますとの表明があり会場は更に盛り上がりました。



後列左より：阪口正洋 (H23) 細木茂 (H8) 久米雄一郎 (H20) 松尾寛 (H6) 杉原聡 (H3) 水野恵介 (H8) 内山順造 (H3) 入江琢也 (H4) 諸井隆一 (H4) 横塚由美 (H6) 小西晶子 (H6) 伊藤美奈子 (H6) 高木紀美代 (H3) 内田光一 (S62) 赤沼真夫 (H3)
中央：岩部真人 (H15) 村松明子 (H4) 西園千史 (H10) 武田早苗 (H6)
前列：古市眞 (H元) 山田治来 (H2) 尾島博 (S61) 西山成 (H5) 星川広史 (H2) 伊藤正裕 (S62) 佐々木豊明 (S63)

また讃樹會研究奨励金の贈呈が日本医大血液内科の阪口正洋先生（H23卒）に行われ、その後はテーブル毎に参加者が近況報告を行いました。

臨床、教育、研究の現場でエキスパートとして日々過ごされているお話が多く聞かれた中、新型コロナの象徴となった客船ダイヤモンドプリンセス号に内山先生が医療チームとして、横塚由美先生（H6卒）が厚生労働省の検疫官として乗船された話、姫路市医監の北窓隆子先生（S61卒）からは全国的にも珍しい独自の薬剤耐性（AMR）対策活動を市長の清元秀泰先生（S63卒）と共にやっている話をお聞きし、卒業生が医療行政、施策の最前線でも活躍されている事がよく分かりました。

また同期の伊藤美奈子先生は“音楽と医学の融合”というコンセプトでジャズシンガーとしてもご活躍で、本格的な歌声で皆を和ませてくれました。その他にもMBAを取得し病院経営にも生かされている先生など、オリジナリティ溢れる医師像を持ち活躍されている方々の様子が良く伝わって来ました。

最後に赤沼真夫先生（H3卒）からは「松尾とかこいつらは皆、俺の弟（妹）やと思っとるから」と言って頂き心に温かいものがこみ上げてきました。私は学生時代所属していた軟庭部、軽音部、住んでいたア

パートの先輩方には特にお世話になりましたが、全く土地勘のない東京での入局から開業に至るまでは在京同窓生のアドバイスなしでは考えられなかった事で、ご縁の大切さを改めて感じております。とくに吉田浩一先生（H1卒）、石井靖宏先生（H3卒）にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

私は香川を離れても育ての親である母校を思い同窓生たちが縦横にご縁をつなぎ、何かの折にはより力強く支え合って医療に貢献していく事が出来ればと切に願います。そうしていくことで“一隅を照らす”という言葉のように香川大学医学部に更に明るい展望が開けて来るように思います。

最後になりますが周到な準備に加え絶妙な司会で本会を盛り上げてくださった内山先生、いつも陰ながらサポートしてくださっている讃樹會事務局の皆様にも厚く御礼申し上げます。



第22回讃樹會関東支部会開催報告 Vol. 2

日本医科大学 血液内科

阪口 正洋（平成23年卒・26期生）

コロナ禍から抜けた快晴の令和5年11月19日（金）、横浜みなとみらいのホテルニューグランドにて、4年ぶりに対面のかたちで第22回讃樹會関東支部会が開催されました。私は卒業後より故郷の大阪府で初期研修を過ごし、平成25年に都立駒込病院の後期研修医となり、平成29年に日本医科大学へ入職し現在に至っています。気がつけば10年も関東で生活しておりますが、これまで讃樹會関東支部会に参加したことがありませんでした。そのようなところへ令和4年に日本医科大学 内分泌代謝・腎臓内科学分野の主任教授に着任された岩部真人先生（平成15年卒）にお声がけいただき、今回初めて参加



乾杯：西山成医学部長



ジャズライブ：
伊藤美奈子先生



司会：内山順造支部会長



左：岩部真人先生、右：坂口



しました。支部会長の内山順造先生より開催報告の役を拝命賜りましたので、僭越ながら寄稿させていただきます。

司会の内山先生と伊藤美奈子先生のご挨拶とともに開会となりました。大学よりお越し頂いた西山成医学部長よりご挨拶を頂戴し、母校の最近の様子に関するお話に懐かしさを抱きつつ拝聴させていただきました。それに引き続き、恥ずかしながら偉大な先輩方の前で私の令和5年度讃樹會研究奨励金の受賞式を行って頂き、先生方から応援のことばも多数頂戴しました。この受賞に恥じぬよう、しっかりと研究成果を出せるよう取り組んでいきたいと思えます。その後は順次参加された先生方より近況をお話され、伊藤美奈子先生のジャズライブも披露して頂きました。コロナ禍の空港検疫の対応に苦勞された横塚由美先生のお話はとても印象に残っております。歓談中は大学生活の思い出をお互い語り合い、学年の離れた先生でも同じ環境で過

ごされたことが容易に共有でき、普段の職場では得られない居心地のよさを感じました。またお互いの専門領域についても情報交換し、新たなつながりを構築することができました。最後は出席者で記念撮影を行い閉会となりました。

関東支部会に参加し、さまざまな分野で活躍されている母校の“仲間”と知り合いになれる貴重な機会だったと率直に感じました。ご参加いただきました先生方、讃樹會の柚山様、他ご協力いただいた方々に心より深謝申し上げます。今回のタイミングで関東支部会長が内山先生から岩部先生へ継承されることになりました。同窓生の貴重なつながりを構築できる機会を今後も維持し、関東支部会をさらに発展させていくことは同窓の先生方も良い影響を享受できることにつながると思います。来年も開催される（令和6年11月17日）予定ですので、関東でご活躍されている同窓の先生方をはじめ、地域を問わずご参加いただければと思います。



学生支援（競争的資金）活動報告

2023年度

讃樹會では、学生生活の活性・充実に資することを目的とした学生支援を行っています。採択は年間5件に限られます。このことにより、将来的な競争的資金獲得の練習の場となることも期待しています。

募集要項は讃樹會HPを参照下さい。

IFMSAK活動報告 学校での国際交流推進にむけて

IFMSAK留学担当 医学科2年 深澤 莉生

IFMSAK Exchange部門では、主に留学生の受け入れ・送り出しや留学生との交流、留学に向けた英会話の勉強を行っています。

今年度はタイからの留学生3名、ブルネイからの留学生1名と交流を行いました。留学生とは地域のお祭りに参加し花火や屋台を楽しみ、将棋や折り紙など日本の遊びを行い、また留学生の母国の文化を教えることで互いの文化を交換しながら交流を深めることができました。2024年2月には、国際医学生連盟(IFMSA)の留学制度を利用してスペインからの留学生を1名受け入れる予定です。本サークルが活動を開始してから、二人目の受け入れとなり、現在はメンバー全員で協力して受け入れ準備を行っています。受け入れ時には、サークル以外の医学生にも参加を呼び掛け、学内全体での国際交流を推進していく予定であり、医学部全体で留学生のサポートを行い、一般学生と積極的に交流できるイベントも計画しています。

また、来年度には本校からも3名留学生を送り出します。留学に向けて、留学生と話す機会を増やし、普段のサークル活動で英会話の強化など、現地で充実した留学生活を送れるようメンバー全員で尽力しています。

本サークルは新型コロナウイルスの感染拡大が落ち着いた現在、徐々に活動を盛り上げていく過程にありますので、来年度も温かく活動を見守ってくださると嬉しく思います。

IFMSAK

(International Federation of Medical Students Associations-Kagawa Exchange Support Club)



▲ ブルネイからの留学生と一緒に折り紙



タイからの留学生と地域のお祭りへ ▶

香川大学学生ACLS勉強会 救命活動・AEDを体験しよう

香川大学学生ACLS勉強会 代表 医学科3年 森 尚希

私達ACLS勉強会は毎週、救命活動の実践練習を行っています。そして学んだことや身につけた技術を実践する場として定期的に講習会を開いています。今年度の活動報告では「ICLS講習会（2月26日）」と第44回医学部祭での「AED体験会（11月8日）」について報告させていただきます。

「AED体験会」では倒れている人を発見してから救護を行うまでの流れを、シナリオを通して体験してもらいました。そのなかで実際にAEDに触ってもらうことでAEDの使用方法について理解を深めてもらいました。またパッドの付け方や、胸骨圧迫を再開するタイミングなどを含めた、実践で使える技術を身につけてもらいました。「ペースメーカーがついている場合や、体が濡れている場合などはどうすればよいか」などの質問や「倒れている人を発見したら駆け寄る前に必ず周囲の安全確認を行うが、現実では、助きたい一心ですぐに駆け寄りたくなってしまいそう」などの感想もいただきました。一般の方も参加できる医学部祭は久々であり大変でしたが、学祭に行って救命活動を楽しく学ぶことができ良かったと多くの方に言っていただきました。来年も開催したいと思います。

「ICLS講習会（2月26日）」は主に新入生を対象に行う講習会です。シナリオを通してBLS・ACLSの流れについて学んでもらいました。正しい胸骨圧迫や気管挿管、除細動など個々の手技を体験・練習した後に、院内での心停止に対する救命措置を行いました。講習会を通してACLS勉強会の活動を知ってもらうと共に、救命活動の基本を身につけてもらいました。毎年恒例の講習会であり、来年も開催したいです。



▲ AED体験（第44回医学祭）の写真です。医学祭にお越しの親子にAEDの使い方、救命措置を披露している様子



▲ ICLS講習会に参加した学生さんが、モニター付き除細動器による電気ショック（除細動）を行う様子



◀ AED体験（第44回医学祭）終了後の記念撮影



2023年8月の水プロジェクトでカンボジアの小学校を訪問

香川国際協力NGO U-dawnは、2021年4月11日に、香川大学医学部の学生数名で設立した国際協力団体です。香川大学全学部から同じ志を持つ学生を集め、カンボジアへ、2023年は医療・水の支援を実行しました。

医療支援プロジェクト（医療P）では、特に「新生児医療」の分野の支援をしています。カンボジアの新生児死亡率は日本の14倍に及びます（「ユニセフ世界子供白書2021」参照）。これは、ポル・ポト政権下の大虐殺を背景に、医療機器だけでなく、医学教育の機会の不足による影響が大きいです。2021年度の活動として、クラウドファンディングを実施し、新生児蘇生法（NCP）の訓練用的人形2体を購入しました。2022年5月に、この訓練用的人形2体を、カンボジアで活動されている特定非営利活動法人サイド・バイ・サイド・インターナショナル（SBSI）へと寄贈し、SBSIと合同で州立病院をターゲットとしたNCP講習会を開催しています。2023年は、2度の講習会を開催することができましたのでご報告申し上げます。

第3回目となる講習会は、春季休業期間を利用し、学生3名がカンボジアへと渡航し、JICAに所属され現地でご活躍されている助産師の方に講師を依頼し、コンポンチュナン州立病院にて行いました。

また、講習会開催に際し、学生のNCPへの理解を深めるため、香川大学医学部附属病院小児科にご協力いただき、NCP勉強会を行いました。

さらに、夏季休業期間を利用し、学生4名がカンボジアへと渡航し、第4回目のNCP講習会を開催しました。タケオ州立病院で行った講習会には、医師・看護師・助産師の延べ22人に参加していただきました。講習会前後で行うテストの結果について、全ての職種で、平均で約50%もの向上が見られました。これは、講習会を重ねて指導内容や方法の改善を、現地



3期（2023年9月末）時点の全体集合写真

香川国際協力NGO U-dawn 「カンボジアへの新生児医療の 継続的な支援に向けて」

香川国際協力NGO U-dawn 3期代表 医学科5年 茂木 貴慧



2023年3月の渡航

の講師とやりとりを重ねた結果であると考えております。

医療Pだけでなく、水プロジェクト（水P）でも、大きな成果をあげることができた1年でした。水Pでは、生徒数に対してトイレの数が極端に少ない小学校へ、トイレを建設する活動を行いました。クラウドファンディングでは、多くのご支援・ご

声援を賜り、誠にありがとうございました。水Pの活動報告を含めた活動報告は、U-dawnのホームページに掲載しておりますので、ご一読いただけますと幸いです。

HP：<http://u-dawn.com/>

U-dawnは『今日の笑顔を守り、明日の可能性を広げる』をビジョンとして活動しています。カンボジアの人々の笑顔を増やすという大きな目標のもと、香川大学生の挑戦の場となり、香川大学、ひいては香川県全体に笑顔の連鎖を生むことが私たちのゴールです。

2024年度は、医療Pの新生児蘇生法普及の取組みの拡大に加え、新しいプロジェクトも発足し計画が進んでいます。

自ら考え、挑戦できる環境をいただけていることに感謝を申し上げます。

引き続き、温かく見守っていただけますと幸いです。



2023年8月の渡航



2023年10月6日から8日の3日間、香川大学医学部で、医学部の学生・教職員や地域の人々に向けて香川大学医学部祭が開催されました。今年度は新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑み、十分な感染症対策のもと、規制の無い医学部祭を本来の形で行うことができました。

本年度の医学部祭では、「医学部祭だヨ！全員集合～今日だけは鉛筆置いちゃいな祭～」というテーマを掲げました。メインテーマである「医学部祭だヨ！全員集合」には、医学部祭に学生や地域の人々全員が集まり楽しめるような学祭にしたいという思いを込めました。そして医学部内においても、繋がりが薄れてしまった先輩・後輩、同学年との縦と横の関係性を、全員が集まって学祭に参加することによって、より強固なものにしたいという思いがあります。また、サブテーマである「今日だけは鉛筆置いちゃいな祭」には、医学生の本分は勉強である一方、医学部祭の期間だけは鉛筆を置いて全力で医学部祭を楽しんでほしいという思いを込めました。医学部3年生を中心として構成される実行委員会が発足した4月から半年間、勉強や部活動と両立しながら実行委員一同熱意をもって取り組み、このテーマに恥じないよう素晴らしい医学部祭を目指して協力し、無事終了することができました。

私たちは医学部祭を通して、香川大学医学部に「一体感」をもたらし、一丸となることで、地域社会に対して



も「存在感」を出し、より意識されることを目標とし、準備を進めて参りました。そのために当日は様々な企画を実施しました。医学展では医学部生の日頃の学習成果を発表する場を提供し、学生と医師の医学をテーマとした講演会を行いました。またステージ企画では屋内、屋外の2つのステージのうち、屋内ステージでは軽音楽部・アカベラサークル「S-po」によるライブ、また4組の有名お笑い芸人によるライブが行われ、屋外ステージではダンスライブに加え、BINGO大会や医学部生が出演するコンテストなど実行委員による様々な企画が行われました。また、看護学科教育研究棟では医学部管弦楽団による演奏会も行われました。「医学部

Radio」という新しい企画もスタートし、医学部の学生が附属病院の患者様や職員の皆様からのメッセージに答えながら、様々なトークを提供しました。さらに、各部活動が協力して運営する模擬店も設け、多くの参加者から「医学部祭本当に楽しかった。開催してくれてありがとう。」という感謝の声を頂き、半年間辛いことも沢山あったけど楽しんでもらえて、医学部祭を実施してよかったと実感できた瞬間でした。初めは不安でいっぱいでしたが、沢山の皆様に支えられ、自分が理想としていた医学部祭を実現することができました。医学部祭に参加される方が少しでも楽しんでいただけるならと少しも妥協することなく、4年間の時を経て新たな医学部祭の歴史をスタートできたことを嬉しく思います。

最後になりましたが、第44回香川大学医学部祭を開催することができたのは、讃樹會、医師会、学生会、後援会、学友会、本学の皆様、香川大学の教職員の皆様のご支援・ご協力あってのことと、改めて厚く御礼申し上げます。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。来年度、第45回香川大学医学部祭も更なる充実を図り、参加された方にとって素晴らしい体験となることを期待しています。どうぞ足をお運びいただけますようお願い申し上げます。



縁の下の力持ち！会場局！軽トラで医大内を駆け回り会場準備は大忙しでした。



高校生を対象に各学部で入試相談会も行いました。



▲ステージでの企画（なんでもコンテスト：king of stage～このステージ激熱なのなあぜなあぜ？～）の様子です。



学祭の盛り上げ役！企画局。毎日リハーサルで夜遅くまでお疲れさまでした。



▲お笑い芸人ライブにはZAZY、オダウエダ、レインボー、エルフの4組が来てくれました！目玉企画なだけあり、会場は大盛況でした。

今年度の学祭のポスターです。スポンサー様の店舗での掲示や実行委員会の局員で地域の方へのビラ配りも行い、1000枚以上配ることができました。



第44回香川大学医学部祭、終幕！

「医学部Radioが附属病院と学生とを繋ぐ」

医学科3年 第44回香川大学医学部祭実行委員 一ノ瀬 直人

讃樹會の皆様、初めまして、香川大学医学部医学科3年の一ノ瀬直人と申します。

この度は10月6、7、8日の3日間に渡って行われました、第44回香川大学医学部祭での「医学部Radio」という、本年度の学祭からの新しい取り組みについてのご報告を、讃樹會の先生方に向けて行なってほしいというお話を頂きました。以下、拙い文章になると思いますが、ご一読いただければ幸いです。

まず本年度の医学部祭は「医学部祭だヨ！全員集合～今日だけは鉛筆おちゃいな祭～」をテーマに掲げ、現医学科3年生を中心とした医学部祭実行委員の全員の協力により、大盛況で幕を下ろしました。そちらのご報告は、私と同じく医学科3年の小倉優仁 実行委員長により別で行われています、是非ご一読下さい。

さて、「医学部Radio」とはどういった活動なのかを申しますと、我々学生が隣接している附属病院にアンケートボックスを設置し、そこで得られたアンケートに対して、学生視点からの回答を病院の患者さんや職員も対象に発信した試みです。

今回の取り組みには『大学病院は学生教育を行なっているが、患者さんからは学生の活動があまり見えない』という状況を改善したいという思いが込められています。私たち学生は現在、長きに渡った新型コロナウイルスの影響も緩和されたため、大学に通って学習に励むことが可能となりました。ですが、同じ敷地内の附属病院の中にある医師、看護師、病院職員、そして患者さんの姿を学生が目にする事ができるのは、4年生の後半から始まるポリクリをきっかけとします。それまでは学生と、附属病院の中にいる方々との関係は、お互いに想像をし合う関係でしかありません。「医学部Radioは附属病院と医学部とを繋ぐ架け橋となるような放送を行いたいと思っています」これは、学祭当日に行われたラジオの放送で、初代メインパーソナリティーの医学科2年 大森純一郎くんが実際に発したコメントです。

今後は患者さんや地域の人々から教育をしていただくための環境整備を、学生自身が行なうことも重要だと考えます。今回の医学部

当日のラジオ放送の様子です、左が筆者、右がメインパーソナリティーの大森君です



ラジオはアンケートの回答をメインに、医大までの交通アクセスなどを盛り込んだ内容になりました。来年度はそれに加えて、ラジオ内での新しい企画を行い、医大外の方の取材なども行う方針です。ラジオから発信される情報が様々な人にとってのニーズを満たされる様に、今後も継続して活動に取り組みます。讃樹會の先生方には是非とも今回の活動を知っていただき、ご声援を頂ければ幸いです。

またRNCラジオ（西日本放送）とも協力し、活動の幅を広げています。来年度の学祭ではさらにパワーアップした医学部Radioの活動を行うことができることでしょうか。医学部Radioの益々の活躍ぶりに、目が離せません！

最後になりますが、讃樹會の先生方におかれましては、引き続き、ご指導ご鞭撻をよろしくお願い致します。讃岐の丘の益々の発展と健勝を祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。

当日の放送の様子を私が写真撮影しました、機材なども本格的です



現住所、勤務先、役職、メールアドレスの変更、改姓などがありましたら必ずご連絡下さい。ご連絡は、讚樹會HP、メール、FAX、郵送いずれでも結構です。



香川大学医学部医学科同窓会讚樹會行き

(TEL・FAX 087-840-2291)

スマホはこちら

会員情報変更届

記入日 年 月 日

卒業年	S・H・R・院 年	希望送付先	勤務先・現住所・実家
該当するものに○をお付けください	開業医 / 産業医 / 勤務医 / 研修医 / 在校生 その他 ()		
ふりがな			
氏名 (旧姓・旧名)	()		
現住所	〒		
	公開 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/>	TEL	FAX
	E-mail		
勤務先	名称	部署	
		役職	
	〒		
公開 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/>	TEL	FAX	
E-mail			
恒久的住所 (実家)	(氏名・続柄) 〒		
公開 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/>	TEL	FAX	
連絡事項及びメッセージ 			

※公開の可・不可にチェック を入れて下さい。

(事務局記入) 処理日 年 月 日

切り取り線

編 集 後 記

元日に発生した能登半島地震で亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、被災された方々にお見舞い申し上げます。また、一日も早い被災地での復旧、復興をお祈りいたします。更に翌2日夕方、羽田空港での事故があり、3日には、北九州市小倉北区鳥町食堂街での火災で連日の災害と事故によって、今年の見通しにさらなる不安が増しております。

第18回定期総会と令和6・7年度の会長選挙及び理事選挙のお知らせをご一読ください。同窓生教授就任のご挨拶を、15期生の井上茂亮先生（和歌山県立医科大学 救命・集中治療医学講座）と門田球一先生（香川大学医学部病理病態・生体防御医学講座分子腫瘍病理学）から頂きました。医学部長退任／就任挨拶を三木崇範先生（神経機能形態学講座教授）と西山成先生（薬理学教授）より頂きました。卒業生の活躍はうれしい限りで、今後も各先生には我々をご指導いただきたく思います。讃樹會市民公開講座も杉元教授をお招きし、大盛況な会となりました。新年から良いニュースがない中、讃樹會としましても明るい話題の多い一年になることを期待したいと思います。

さて、本号ですが、国外留学助成・研究助成／奨励受賞者のあいさつ、学会報告、支部会・懇親会の報告と多くの話題が記載されております。医学部祭の活動報告や病院ラジオの活動を掲載させていただきました。積極的に活動する学生の姿に懐かしさを感じました。

「被災地のために何ができるか」と語る人がいます。企業・団体からのまとまった支援物資は、避難所で重宝されます。しかし、個人からの支援物資の送付は、被災地での仕分けの手間を考慮し、受け入れない、さらには控えてほしいという声も聞きます。例えば、個人で支援できることとして、義援金送付、ふるさと納税があり、ふるさと納税の場合、「返礼品なし」を選択すると、ポータルサイトに手数料が入らず、寄付先の自治体に直接、寄付金が届くようになっています。被災者の健康被害や災害関連死を減らすため、香川県内からもDMATが派遣されています。医師が地域の健康を守る重要性を痛感します。

毎号のことながら、ご多忙中にも関わらず寄稿してくださいました皆様、讃樹會会員、事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。更に親しまれるような紙面になるよう、微力ながら努力してまいります。些細な事でも結構ですので、ご意見ご提案がございましたら宜しくお願い申し上げます。

広報局長 谷 文二（平成14年卒・17期生）

事務局からのお知らせ

◇医師賠償責任保険を年間通して受け付けています。
（途中加入ができます）詳細は事務局にお問合せ下さい。

◇助成金公募のお知らせ：助成金申請の詳細は、讃樹會HPの「要項・ダウンロード」を参照下さい。

◆2024年度研究助成金／奨励金公募

2024年2月1日～4月30日締切

◆国外留学助成金公募

2024年度第1回国外留学助成金 2024年3月末日締切

2024年度第2回国外留学助成金 2024年9月末日締切

◆学会助成金公募 開催前年6月末日までに申請下さい。

◆準会員（医学科在校生）対象の助成金

「学生の国際交流助成」：帰国後1ヶ月以内に申請下さい。

「学生支援（競争的資金）」：2024年7月20日を一次締切とします。

◇変更連絡：現住所、勤務先、役職、メールアドレスの変更、改姓などがありましたら必ずご連絡下さい。
ご連絡方法は、讃樹會HPから入力、メール、変更届用紙をFAX、郵送いずれでも結構です。

〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
TEL 087-840-2291
E-mail mddousou@kagawa-u.ac.jp
HP <https://dousoukai.site/sanjukai/>

訃 報

名誉会員
酒井俊一先生

2023年2月

正会員

藤井一弘先生（平成7年卒・10期生）

2023年11月

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

